

冒険の書—ロトゼタシアの勇者の聖杯探索—

陽朧（ゆっくり再開）

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

人理修復を急ぐカルデアに、突如それは姿を現した。

人類最後のマスターとなったりツカは、朝起きると窓の外に巨大な星が浮かんでいるのを見つける。

なんとそれは『勇者の星』と呼ばれる凶星であったのだ。

——それが、カルデア陥落への合図であることを誰が予測したであろうか。

命の大樹の申し子は目覚める。

その肩に新たな使命を背負って。

世界を越えた勇者は、その先でとある英霊と出会い、再び時を越える。

これは、物語の裏に消えた勇者の記録である。

—注意—

- ・原作の捏造・改竄あり。
- ・カルデアが一度陥落します。
- ・FGOの世界にDQ（大半はDQ11）要素を混ぜた感じです。
- ・勇者の名前は『イレブン』となっております。
- ・主人公は喋りません。

目次

目醒めと眠り	1
運命その名は	13
出会いそして	22
求めし者たち	31
始まりの試練	38
交差する運命	46
過去より来る	58
新たなる再会	69
勇者の聖杯探索	83

目醒めと眠り

おきのどくですが

あなたの*****は

きえてしまいました。

あらたに ぼうけんのしよを つくりますか？

↓はい

いいえ

あなたの なまえを にゆうりよく してください。

↓*****

……。

イレブン でよろしいですね？

↓はい

いいえ

よくぞ もどられました。

はじまりの ゆうしゃ イレブン よ。

あなたは おおになるしめいを すでにあたえられているようです。

かみより たまわりし おつげを ききますか？

↓はい

いいえ

——いのちの たいじゆの もうしごよ
——ながき ねむりから さめるときが きました

——いま ふたたび せかいをすくうのです
——たとえ それが けっしてまじわらぬ ことのない せかい
だとしても

——ゆうしやとは ゆうきをもち ゆうきを あたえる もの

——いま あなたを もとめるものが います
——たとえ それが だれのきおくにも のこらない ことくな
たたかいだとしても

——あなたは いかなければ なりません
——その てのこうに きざまれた もんしょうの もとに

——ときは きたれり
——いまこそ めざめるとき
——ゆうしやよ いま ふたたび けんを……。

……。 ああ たびだたれる のですね。
かみさまは あなたを
いつも みまもっておいでです。
どうか お気をつけて。

ゆうしや イレブン は、
たびだつことを えらんだ。
そして よが あけた！

「神の乗り物ケトス……かあ、」

「ふふっ。またそれを読んでいるんですか、先輩」

「うん、みんなが口を揃えているからさ。」

俺が読んだことがないっていうのが、余程衝撃だったみたい」

「それは納得です。」

冒険の書は、世界各地で共通して読まれている伝記ですよ。

教科書にも乗るレベルのものです。

知らない人間の方が珍しいくらいですから」

「うう……。その珍しい人間だったわけか」

「そりゃあ……。レア度というと星5つです、先輩」

「そんな嬉しくないレア初めてだよ」

ふさふさとした高級感のある赤い表紙に、打ち込まれた金の文字。
日本語版であるため、日本語で書かれたタイトルを、リツカは指で
なぞった。

黒髪の少年、リツカが人類最後のマスターとなってしまうのは、半年前くらいであろうか。

魔術も使えない、魔術回路も並み程度という良くも悪くも平凡な少年は、個性豊かな英^{サーヴァント}霊たちに鍛え抜かれていた。容赦なく飛ばされるレイシフト先で、習うより慣れるというように戦場に赴き、死ぬ物狂いで戦い、その中で学び続けてきた。

リツカの体に傷が増えるに従い、戦いの経験が増えていく。

そして、戦いの中で絆を結んだ英霊たちが、カルデアへと召喚され、気が付けば静まり返っていたカルデア内も、逆に静かな場所を探すのが難しくくらいにまで増えていた。

相変わらず忙しい日々が続いていたが、それは少し余裕が出来るようになっていった時期であったと、リツカは記憶している。『あの本が読みたい』と幼い姿をした気難しい英霊に言われたのが始まりである。

聞いたこともない名前の本に首を傾げたリツカを見た、英霊は表情を変えた。

「まさか、いや……まさか、お前、知らないのか？」

「え？そ、そんなに有名なの？」

「……」

「あ、アンデルセン？」

「……。マスターよ、今すぐ管制室に赴き、あの軟弱男からぶん取って来るのだ。」

ああまで、あの英雄王でも、いやこの際もはや誰でも良い！

あれが図書館にないとは論外だぞ馬鹿め」

その表情は、怒りも怒りも何もかも超越した完全な無であったと、後々リツカは振り返る。

言われた本のタイトルを求めたりツカは、結局偶々廊下を歩いていた太陽王に声を掛けることになったのである。リツカの話に大層驚いた素振りを見せた英霊は、直ぐに彼を自分の書庫に連れて行くと、その本を手渡した。手渡されたといつても、分厚い本を何十冊一度に

寄越されては、支え切れるわけがない。

思わずその本を落としそうになると、突然現れたニトクリスに助けられ、序に説教をされる羽目になったのである。……その話はまた後日するとして、そうして手にした本を、リツカは読み耽っていた。

あまり紙の本を読むという習慣はなく初めは腰が重かったが、ペーヅを捲る度にその世界へと引き込まれていったのだ。今では立派な中毒者である。

同じくらしい年で、世界という大き過ぎるものを背負い戦うその姿に、リツカが抱いたのは憧れであった。本の中の主人公は、自らの力で戦い、仲間と力を合わせて運命を切り開いていく。

同じような使命を背負うリツカだからこそ、余計に共感する部分があり、そして思う部分もあったのだろう。

リツカが、冒険の書の一冊を読み終えた日の翌日のことであった。

「い……、ばい、……！先輩！」

「……う、ううん、……マシユ？」

「起きてください！外が！」

「へ？外……!？」

日が昇ろうとしている時間に、相棒であるマシユに叩き起こされたリツカは、何か嫌な予感を抱いて飛び起きた。険しい顔をしたマシユに手を引かれて部屋を出ると、そのまま廊下の窓へと行き着いた。

何人かの英霊が揃って空を見上げており、彼らはリツカを見ると、静かに空を指差した。

「おう、マスター。朝から最悪なお知らせだ」

「キャスター？どうしたの？」

「……っ!?なに、あれ……!？」

マシユと同様に、戦闘時に見せるよりも険しい顔をしたキャスターのクーパーリンが、リツカに声を掛けた。これだけの英霊がいるのに、しんと静まり返った空気は、緊張を孕んでいた。

リツカは空を見上げる。

するとそこには、赤々と燃える巨大な球体が浮かんでいた。

今にも零れ落ちんばかりの距離にあるそれは、昨日まではなかったものだ。

目を見開いたリツカが、よくよくそれを見ると、何か魔法陣のようなものが編み上げられて出来ていることに気が付く。

「気が付いたかい。お前さんも随分成長したモンだ」

「……あれって、」

「あれは、かつて勇者の星と呼ばれたものですわ」

後ろから聞こえた声に振り返ると、少女の姿をした英霊マリーと、彼女の世話を何かと焼いているアマデウスの姿があった。いつもの可憐な笑みを打ち消したマリーは、リツカを見上げると困ったように眉を下げる。

「でも、その正体は……」

「なんと邪神ニズゼルファの封印体だったのさ！」

「にず……。つて、まさか」

「そうだマスター。アンタが最近読み漁っている冒険の書、第一章に書かれている邪神サマサ」

「え、えええええ!!? そんな……。なんで!?!」

「……そりゃあこつちが聞きてえなあ。

奴さんやつこ突然現れやがったんだ」

「でもおかしいわ。邪神は勇者によって滅ぼされたと聞きます。

あの封印体が存在するなんて……」

「ああ、マリー。そんな顔をしないで。」

今管制室で緊急会議が開かれている。

直ぐに対策が講じられる筈さ」

「……とはいってもなあ、アレが現れたのは云千年も前の話だろ？」

「ええ、伝記では『大地が落ち、世界が闇に包まれた後……』

突如として落下を始めた”そうですわ。

……ねえ、マスター。私……嫌な、予感がするの。

こんな気持ち、あの時以来だわ」

ぎゅつと胸の前で手を組んだマリーは、不安げな表情を隠せずに、空を見上げる。

リツカは何も言わずに、それを見た。

赤い球体に刻まれたオレンジの魔法陣は、熟れたトマトのようである。

——巨大な星が落ちる。

それはもしかしたら、今まさに救おうとしている世界の終焉を示しているのかもしれない。

この崩壊を迎えようとしている世界に、それは絶望の星しほしほであったのだ。

どこからか、澄んだ笛の音が聞こえる。

高く高くどこまでも清らかなそれに、豎琴の優しい音色が交差していた。

いつか、どこかで聞いたことのある、懐かしい調べ。

揺蕩う意識の中で、記憶が呼び起されようとしていた。

——双子の賢者の調べに、飛来する光の粒たち。

やがて一つの光となり、剣に宿る。

光を纏う剣を、選ばれしものの紋章を持つ勇者が掲げた。

高く、高く伸びる、光の柱は、

空を泳ぐ、聖なる鯨を覚醒させた――

今となつては、過ぎ去りし思い出であり、書物に記された伝記の一つである。

求めた世界で真の敵を打倒し、世界が平穏となつた後、その記憶は人々の手によつて一つの本となり、その名を継ぐものたちへと残されていった。

――ロトゼタシアを救いし勇者は、命の大樹である聖竜から『ロトの勇者』の称号を授かつた。

『世界に闇が齎されしとき、光を継ぐ勇者が生まれるであらう』

いつかの時代に予言された言葉通りに、彼らは生まれ、運命に従い、闇を払う光となつた。

彼らの記録は『冒険の書』として記されていき、大地が生まれし時から現代に至るまで、ずっと受け継がれてきたのである。

眠りについたその魂は、今、この時、再び肉体を得て覚醒の時を迎える。

大空を泳ぐ、神の乗り物ケトスは、かつて二度勇者を背に乗せ、魔王の張り巡らせた闇の結界を打ち破つた聖獣である。かの背中に集まつた光は、やがて人の形を成した。

勇者の再来に、ケトスは声を響かせる。

希望の誕生を、大地に知らせるように。

戦いの訪れを、世界に知らせるように。

闇と、光。それは決して交わることはないもの。

ケトスは、その再会に歓喜した。

強さと優しさを持ち合わせた、清らかなその少年を気に入っていたからだ。

ケトスは、その再会を悲しんだ。

勇者とは常に戦いと共に在る、その運命に翻弄された少年に安らぎ

はない。

ふと、光が止んだ。

吹き荒ぶ風が、さらさらとした髪を撫でる。

開かれたその瞳に宿る強い光は、何時如何なる絶望の淵に在ろうとも決して絶えることのなかった、勇者の光。

——勇者 イレブンよ。

再びまみえることが出来たこと 心より嬉しく思います。

ぱちぱちと目を瞬かせ、周囲を見回しているイレブンに、ケトスは話しかけた。

金色の甲冑にも似たケトスの体が、太陽の光を受けて穏やかに煌めく。

——あなたを 求める声が 聞こえます。

それは とても遠い世界……。

本来であれば 届く筈のない 声。

——あなたは 行かねば なりません。

命の大樹の申し子として ロトの勇者の名を授かりし者として。

——世界を越えたその先で あなたは この使命の意味を 知るでしょう。

——我が心 勇者ローシユと そして あなたと共にある。

ああ そうですね。

彼らの心も あなたと共に……。

どうか 忘れないでください。

いつの間にか背負った剣は、かつて仲間と鍛え……。いや、命の大

樹から授けられた勇者のつるぎであった。戦いが終わった後、大樹に返した筈であるが、イレブンが再び使命を背負った証とするかのよう
に、そこにあつた。旅装束である、紫を基調とした服は当時のままだ。
言わずもがな、その手の甲には竜の紋章が浮かんでいた。
凜とした優しい声に、イレブンはかつての仲間たちを思い出す。
共に戦った大切な仲間たち。世界に平和が齎された後は、それぞれ
がそれぞれの場所で活躍していたが、彼には忘れられない記憶があつ
た。

勇者であるイレブン以外は、誰も覚えていない『**』
こびり付いて落ちないそれを、彼はひっそりと引き摺っていた。

『これから先、このあたしがその背負ってる使命ごと、アンタをずーつ
と守ってあげるから、安心しなさい!』

赤い帽子に赤いスカートを身に着けたおさげの少女が、胸を張る。
彼女は、天才にして至高の魔術師であつた。

『わしは、おぬしを信じとるよ』

『お前は、このわしの自慢の孫じゃからのう!』

白い口髭をたくわえた老人が、慈愛を浮かべる。
彼は、最後の肉親にして青年の見守り人であつた。

『まだ俺にも守るべきものがある。お前が世界を救う勇者なら……俺
は勇者を守る盾となろう』

黒い鎧を纏う厳格な男が、勇者の敵を睨む。
彼は、誇り高き武人であり崇高な正義であつた。

『また私のこと……探しだしてくれませんか?』

長い金髪におっとりとした雰囲気纏う少女が、微笑む。
彼女は、芯の強い賢者であり、勇者を導く女神であつた。

『あなたと出会って、失ったいろいろなものを取り戻せたの。

もう、二度と失いたくない……』

長い黒髪を高く結い上げた女性が、俯く。

彼女は、気品に溢れた嫺やかな姉のようなヒトだった。

『アタシね、考えてみたんだけど、

あなたと別れてまで手に入れたいものなんて、何もなかったわ』

鮮やかな服を纏うハンサムな顔立ちの男性おとめが、真摯に見つめる。

彼女かれは、根底に揺るぎない騎士道を宿した明るいヒトであった。

『オレもお前とはただならぬ運命を感じて、こうして一緒に旅をしているんだ。

お前とならこれから先も、人生楽しくやっていけそうだしな！

よろしく頼むぜ相棒！』

『また、会おうぜ……！』

青いツンツン頭の青年が、笑う。

……彼は、唯一無二の相棒であった。

空へ、空へと羽を広げるケトス。

不意にその前に、光の渦が現れた。

大きなケトスの体を、ひと呑みにできそうなほどの巨大な渦である。

ばさり、ばさりと大きく羽搏いたケトスは、躊躇することなく渦の中へと身を躍らせた。

イレブンは、ただ一度だけ振り返った。

空に浮かぶ、命の大樹。

その下に広がる大地は、ただうつくしかつた。

運命その名は

時空に空いた大きな穴の中から、金色の鯨は舞い降りた。

晴天の空から一変して吹き荒ぶ雪によりホワイトアウトしてしまい、イレブンには自分の掌さえも見えなくなっていたが、そのような中でもケトスは迷うことなく翼を動かしていた。

固く降り積もった雪を崩すほどの強風が、常に吹き荒れる。

だが如何なる強風でさえも、その翼を狂わせることはできない。

雪の中を泳ぐように呼ぶ姿は、あの最後の戦いを彷彿させるものであった。

灰白に塗り潰された世界に、薄らと煙のようなものが見えた気がした。

同時に、何かが焼けたような煙たいにおいが流れてくる。イレブンはよく目を凝らした。

ケトスはその方向へと飛んでいるようであったので、暫くすると、チラチラと見え隠れする赤が姿を現す。それはこの世界で見る唯一の『色』であった。

聳え立つ山の中に建物らしきものが見える。

何かと不便そうな所に建てられたそれは、家というよりも何かの施設、あるいは研究所のように思えた。

先ほど見えたものはやはり煙であつたらしい。なんと煙は、その建物から上がっていたのである。

そうして、やっと全貌が明らかとなった。

雪の中、燻り続ける火。崩れ落ちた建物。

そこには……。

かつての彼の故郷を思い起こさせる光景が、広がっていた。

——……。始まりの地は此処に。

ずっと黙したままであつたケトスが、告げる。

イレブンはただ、じつと、瓦礫となった建物を見ていた。

——空を求めし時は 天空の笛で
どうか私を 呼んで下さい

着地出来そうな距離までその巨体を近付かせたケトスは、イレブンを下すとそう言った。

ばさりと、ばさりと、金色の翼がはためき、降り積もる雪を崩す。ケトスは大きく声を上げると、再び空へと飛び立っていった。

残されたイレブンは、その姿が消えるまでその場に立ち尽くしていた。

「……っ、」

不意に、彼の耳に何か聞こえた。

後ろを振り向くが、人影はなく、崩れ落ちた瓦礫の山がただ広がっているだけであった。

周囲を見渡した彼は、何とか形を残している建物へと向かうことにする。

吹雪に足を取られそうになるが、旅の中で何度も雪山を駆け回った経験が役に立つ。

火が燻った痕を残す壁が、その身を崩しながらも何とか聳えていた。

元は白亜の壁であったのだろう面影を残しながら、ただそこに立つ姿はもの悲しい。

地面に崩れた欠片は爪先で踏んだだけで、あっという間にぼろぼろと碎け散っていった。

守りの壁を失った建物の内部は、雪に侵食され始めていた。その降り積もり具合から、この場所が陥落してからそう時間は経過していないようである。

「……い、」

ふと、声がした。

耳を澄ましたが、それはもう聞こえなかった。

イレブンは入れそうな部屋を一つずつ見ていく。

使い方も名前もわからなかったが、機械のようなものが沢山あることから、やはりこの場所は研究所のような場所なのだろうことは想像に付いた。

彼は部屋の隅に並んだクローゼットへと近付くと、ぱかりと開けた。

中には白衣と、少女を模った人形が置いてあるのが見えた。

フィギュアというヤツであつただろうか。

精巧につくられた少女は、可憐な笑顔と完璧なポーズを保ったまま、綺麗に整列させられていた。

「……お、……」

また、声が聞こえた。恐らく先ほどの声と同じだろう。

イレブンは耳をすませた。

しかし、なにも聞こえなかった。

次に、イレブンはクローゼットの隣にある壺を手にとると、躊躇なく地面へと叩き付けた。

ぱりん、と軽い音を立てて割れた壺の中から葉っぱのようなものが出てくる。

彼は手慣れた動作で、その葉っぱ『やくそう』をふくろにしまう。

そして、部屋をぐるりと見渡すと、踵を返すことにした。

この部屋はもう何もないだろうと判断したからである。

そうして、また次の部屋を探索しようと彼が出口へと足を向けると……。

「お、いー……待……て、」

ぴたりとイレブンの足が止まる。

その声は、今度ははつきりと聞こえた。

声が出た方を振り返ると、なんと半分瓦礫に押し潰された部屋の隅の方に何か蹲っているのが見えた。

それは、深くフードを被っており顔は良く見えないが、ぼろぼろになった服に血が滲んでいることから、何処かを怪我しているのだろう。その姿と苦しみが滲んだ声からして、動けなくなるほどの深い傷を負っているに違いない。イレブンは男に近付くと、膝を付いて様子を見かけた。

「……っは、……。」

随分……騒々しい、物取りが……来たもんだ。

いい度胸、してやがる……」

フードの隙間から見えた獣を想わせる目が、ぎらりと輝く。

男は手にしていた杖を、イレブンに突き付けた。

「……だが、……ここには、もう……なにも、ないぜ……。」

全部、壊されちまった……」

からん、とその手から杖が落ちた。

男は奥歯を噛み締め、口惜しさを隠さずに、イレブンを見上げた。見えるのは口元だけであったが、男の感情を窺い知るには充分であった。

どうやら男に話を聞く必要がありそうだと判断したイレブンは、治療をするためにその手を、男へと翳した。男は警戒するように身を動

かしたが、思うように動かすことができなかつたのだろう。

男が回避しようとするよりも早く、イレブンは呪文を唱える。

——あたたかな光が男を包み込んだ。

「……………っ！……………こいつは、驚いた」

見る見るうちに塞がっていく傷口に、男は驚いた様子で目を見開いた。

そして、魔力の枯渇により鈍っていた頭も体も、霧が晴れるように満たされていくのを感じた。

回復したのは傷だけではなかった。なんとその体に流れる魔力までも、満タンに戻っていたのだ。

「……………アンタ、マスターなのか？」

訝しむ、というよりも不思議そうな顔をしたキャスターに、イレブンは首を傾げる。

その反応に眉を顰めた男は、地に落ちた杖を拾うことなく崩れた瓦礫に靠れると、空を見上げた。

「…………… 此処で何が起きたか知りてえって顔だな。

アンタもワケありだろう？ 此処に新顔が来れるわけねえ」

大きく息を吐いた男は、そう言うとおぼつぽつと語り始めた。

—勇者の星を知っているかい？

ああ、良く知っているじゃねえか。

かの伝説の勇者サマが邪神を討った後、世界を見守るために星と
なった。

だから、勇者の星なんてご大層な名前が付いているが、そりや違う。
あの星は勇者サマじゃなくて、邪神サマが眠っていたってことさ。
んあ？なんでそいつを知ってるかって？

そのくらいは誰でも知ってるぜ。特に俺のような知的な英霊はな。
……何だよ、その顔は。

だがまあ……知られた話でも、あくまで歴史の一つだった。
いや歴史つーよりも、伝説の一つだな。

知っているだけで、実際にそいつをこの目で見ることになるとは
……。

ああ、そうだ。突然勇者の星が、落ちて来た。

空が赤く染まり、頭上には赤い巨星が浮かぶ。

まさに世界の終わりだ。

もちろん、はいそうですかと簡単に諦めるわけがねえ。

何か対策がある筈だと思っとな、カルデア中がてんやわんやよ。

物理的に止めようとしても、魔術を当ててみても……。

何をしても効果はない。

そこでカルデアきつての頭脳派である俺が、転送魔術で星ごと飛ば
しちまおうと提案したのさ。

だがな……問題が起こった。

邪魔が入ったのさ。

エネミーとは違う、あれは伝記に記されていた『まもの』と同じ姿
形をしていた。

闇の気配を感じ取った時は遅かったんだ。

見たこともねえ禍々しいモンがひしめいていやがった。

……。最悪なことに、奴らに英霊おれらの攻撃が一切通用しなかった。

せめてマスターだけでも逃がそうと思っとな。

手を打とうとしたんだが、回り込まちまってよ。

……。ああ、そうさ。守り……きれなかった。

あの機械を見ただろう？

あれは、マスターの代わりに英霊へと魔力を供給する重要な機械だ。

破壊されていたら？

あいつら真つ先にあの装置を壊しやがった。

まるではじめから……。いや、なんでもねえ。

暫くして前衛が崩された。んで、後は想像できるだろ？

魔力供給を絶たれ、マスターを失った英霊は現界するのがやつとだ。

……単行動スキルの低いモンから順に座に還っていったさ。

俺も魔力は尽きていた。もう直ぐ消えると思っただがなあ……。

にしてもわけわからねえ野郎だな、お前さん。

突然現れて何をするかと思えば……。

引き出しは開けるわ、ツボは割るわ、散々荒らしやがって。

火事場の物取りかと思っただぜ。

そんなヤツに、まさか助けられるとはな。

相変わらず悪運が強いのか……。

アンタの魔力は、悪くねえぜ。

……寧ろ、上等だ。これ以上ないぐらいにな。

……。俺の話は此処で終わりだ。

次はアンタの番だぜー

男の話に、イレブンは目を細めた。

この地に現れた勇者の星は、彼にとって憶えがあり過ぎるものであったからである。

何を隠そう、邪神の封印体であるそれを滅したのは、イレブんとその仲間たちであったのだ。

勇者の星が、何故この地に現れたのか。そこまで考えて、ふと気が付いた。

そもそも此処は何処なのだろうか。

ケトスに連れて来られたため、この場所のことを何一つ知らないのである。

はっとしたイレブンは、目の前の男に尋ねた。

「あん？此処は何処だって!？」

……。そういや、アンタ……何処から来たんだ」

男は眉を顰めると、鋭い目をイレブンに向けた。

いくら助けられたとはいえ、疑わずにはいられない。

彼が、いや他の人間がいること自体がおかしいのである。

「……はああ!？ロトゼタシアだと!？」

おいおい、こんな時に冗談言ってる場合じゃね……え……」

イレブンは咄嗟に、自分のいた世界の名を告げてしまったが、よく考えればとてもざっくりとした答えである。世界の名前を言ったとしても、それはそうだろうと呆れた目を向けられるだけだ。少なくとも彼はそう思って慌てて彼がいた村の名前を付け加えようとしたのだが、何故か怒鳴られてしまう。

男の反応を理解できず、イレブンは困惑した。

良くわからないが拙いことを言ってしまったかどうかと、謝罪の言葉を口にしようとした時、イレブンの頭の天辺から爪先まで目を向けていた男が、その険しい表情を変え驚愕した。

その赤い瞳は、……イレブンの、手の甲に注がれていたのだ。

「そ、……の、紋は……!？」

力なく靠れさせていた体を、バネのように跳ねらせると男は、がし

りと乱暴にイレブンの手を掴んだ。

そしてまじまじと手の甲を見る。

そこにあるのは、命の大樹より認められた証である竜の紋章であり、男の言葉に応じるかのようにその紋章はふと光輝いた。

それを信じられないものを見る目で見えた男は、息を詰まらせると、何かを言おうとして口を閉ざす。それを何度か繰り返した男の、震える唇と、手。ぎりりと奥歯を噛み締める音が響いた。

「……………つ、くそ!!…そういう、こと、かよ……………」

あと、……………あともう少し……………、堪えて、いれば……………」

竜の紋章を持つ者。その存在の名前に、男は気付いてしまった。そして、その者が此処にいる意味を……………。

「……………つ……………悪いな、ちいと……………一人にしてくれや」

力なく項垂れた男は、小さな声でそう言った。

イレブンは一つ頷くと、立ち上がる。

そうして部屋を出て行くその後姿を、男は見つめていた。

出会いそして

部屋を出るとイレブンは、建物内の探索へと戻ることにした。

結局此処が何処であるかはわからないままであるので、何か情報は得られないかと、本棚や机を探索したが、有力な情報は見つからなかった。

所々に付いた何かの爪痕を見るに、どうやら先ほどの男が言っていたものに荒らされたらしい。

千切れた配線が、穴の開いた壁から吹き付ける雪によって濡らされる。

この状態ではどの機械も使用は不可能だろう。

それにしても、部屋によつてこんなにも内装や広さが違うとは思議なものであると、イレブンは首を傾げた。外から見た広さと、中に入つて見る広さは全然違うのである。

豪華絢爛に飾られた王宮を想わせる部屋もあれば、畳が張られた和風の部屋もあり、どれもセンスを感じさせる綺麗な部屋であったが、その殆どが荒らし尽くされており、半壊か全壊かをしているので、中に入ることはできなかった。

今のところ、あの男以外に生存者を見ていない。

もしかして全滅してしまつたのだろうかと思ひ、穴の開いた廊下を歩いていく。

建物の中央部に差し掛かると、やっと入れそうな部屋を見つけた。

他の部屋と比べてシンプルな内装であるが、棚という棚にはぎつしりと物が詰められており、一つひとつに感じた不思議な力は一体何であろうか。煌びやかな仮面だったり、調理器具のセットだったり、怪しげな装丁の本だったり、この部屋の主人は随分変わった趣味をしているらしい。

部屋の隅に置かれたクローゼットを、ぱかりを開ける。

中に入っていたのは、やはり殆どが服であった。白い上着と黒いズ

ボンなどの服が綺麗に並んでいるが、その隙間から何かが覗いた気がして、イレブンは腕を伸ばした。

すると、服に隠されるように積み上げられたノートらしきものが、何十冊も出て来たのである。

ナンバリングのみがなされたそれは、酷く草臥れていた。

ぱらぱらと捲って見る。字体は統一されているので全て同一人物が書いたものであろう。時には丁寧に、時には荒々しく書かれた文字を読んでいくと、それが日記であることがわかった。

専門用語らしいものを中心に書かれていたので、完全に読み解くことは出来なかったが、このノートの主は苦悩の連続にあつたらしい。おそらく年若い少年だろうとイレブンは想像した。

読んでいくうちに、自然とイレブンの頭には感受性豊かで心優しい少年が浮かんでいた。

その少年の決して外には出すことの出来ない感情が、そこにぶつけられているような気がして。つられるように、イレブンの脳裏にある冒険の日々が蘇っていく。それは、もしかしたら共鳴のようなものであつたのかもしれない。

ノートを元の場所へと戻すと、次にベッドサイドテーブルに置かれた本を手にとった。

赤い表紙に、金の文字が打たれた、とても分厚い本だ。

この部屋に入った時から強烈な存在感を放っていたそれに、手を伸ばす。

すると、不意に視界の端に何かが映り込んだ。

低い頭身に、円らな目。目の間にある菱形のそれは鼻であろうか。

白い体に、長い手と短い足を持ったそれは、ヨッチ族と呼ばれる不思議な存在であることを、イレブンは知っていた。個体名があるらしいが、会話をするものではないものがないので、取り敢えずヨッチと呼ばせてもらうことにする。

マスコットキャラクターのような見た目のヨッチは、のんびりとイ

レブンに向かつて歩いてくると、じいと顔を見上げてきた。そして、付いて来いというように手を上下に動かすと、再び歩き出したのである。

相変わらずマイペースで良くわからないヨツチという存在の後を追うために、イレブンは慌てて部屋を出て行く。

——誰もいなくなった部屋に残された、一冊の本。

その本の背表紙に刻まれた紋章に、彼は気付くことはなかった。

長い長い廊下を歩いていくと、その先に何かがあるのが見えた。がちやがちやと動き回っているのは、鎧を着た『まもの』であろう。何かを探すように数体の『まもの』が何度もうろろと彷徨っている。

思わず足を止めかかったが、ヨツチは関せずそのまま進んでいく。何故かは不明であるが、ヨツチ族は基本的に人にも『まもの』にも知覚することは出来ないのである。

なので『まもの』の目の前を堂々と素通りして、その先にある部屋へと入って行った。

残されたイレブンは、後を追うしかないのだが……。

「!?」
「!?」
「!?」
「!?」

どうやら、その場にいる全てのまものに気付かれてしまったようだ。

仕方なくイレブンは、背中の剣を抜き放ち構える。
そして一気に片付けてしまおうと足に力を入れた……。

「――アンサズansuzー！」

背中に熱を感じて慌てて振り返ると、一体のまものが剣を振り翳した態勢で倒れていく。

どうやら背後からもう一体忍び寄っていたらしい。
がしやり、と中身の無い鎧は闇を吐き出すと、そのまま消えていった。

「おいおい、マジかよ……。」

これが勇者サマより賜りし力ってヤツか。半端ねえな」

倒したまものその後ろに立つ、魔術師の形ナリをした男は、そつと目を閉じる。

そして再び開眼すると、もうその目には翳りは見当たらなかった。
男はイレブンを目を合わせ、その口角を吊り上げると、自らのフードに手を掛ける。

「さつきは悪かったな。」

俺は、クー・フリーン。

ちいとワケありで、同名のヤツがいるが……。

アンタのクー・フリーンは一人だ。憶えておいてくれよ」

ふわりとフードが落とされ、隠されていた顔が露になる。
はらりと舞う青い髪に、イレブンはそつと息を飲んだ。

「さあて……ここからだ！」

行くぜ、勇者サマ！」

名乗った記憶は無いのにも関わらずその名を呼んだ男に目を瞬かせるも、襲い来るまものたちは待つてはくれない。イレブンは剣を構えなおすと、はやぶさのごとき高速の攻撃をはなった。

——雷鳴が轟き空気が震える。

剣先を走り抜けた金色の光が、闇を切り裂く刃となる。

——渦巻く火炎が大地を這う。

杖先から放たれた紅蓮の炎が、闇を抱いて焼き尽くす。

雷の刃に打たれ炎に包まれた『まもの』は、その膝を付くと溶けるように消えていく。

再び静けさを取り戻した空間に、かちやりと剣を収める音だけが響いた……。

「……は、……ふはははははははっ!!」

それは突然のことであった。

何処からか聞こえてきた高らかな笑い声に、イレブンの肩が震える。

「げ。このめんどくせえ笑い声は……」

驚いたイレブンが周囲を見回すと、その隣でクーフリーンが溜息を吐いた。

「なんだ無事だったのかよ。慢心王」

「くくくつ、慢心せずして何が王か！」

それに……馬鹿め！貴様の目は節穴か！節穴だな！

脳筋風情が魔術師の真似事などするからそうなるのだ馬鹿め！

——何処をどう見ても致命傷ではないか!!」

「ああ、アレだな。わかるぜ

血を流し過ぎると妙にハイテンションになるんだよな……」

「ふん。そこにいるのは、勇者だな。

ああ答えはいらん。その魔力、その剣、そしてその紋を見ればわかることだ。

英雄^{ヒーロー}は遅れてやって来るとは言うが、遅すぎた馬鹿者。

それが許されるのはこの世でこの我のみ！」

「あー。まあ、あれが通常^{スタンダード}運転だ。

まあちいと付き合ってくれや、勇者サマ」

見上げた階段の一番上で、腕を組み踏ん反り返る男がいた。

電気が破壊され、太陽の光も分厚い雲に遮られてしまっているの
で、その姿はあまり良くは見えない。

しかし、その堂々たる佇まいと、砂漠の町で見るような恰好は良く
見えたのだ。

全体を金色で纏めた男は、赤い目を煌々と輝かせてイレブンを見下
ろす。

フォローするようにそう言ったクローフリーンは、小さく笑い目を伏
せた。

「なに？勇者よ。この我を知らぬと？」

……本来であれば、死罪に値する無知^{つみ}であるが仕方あるまい。特別
に許そう」

はあ、と大きな溜息と共に、仕方ないという言葉通りの表情が向け

られる。

そして、咳払いを一つした後その男は、高らかに声を張り上げた。

「ふむ。我は名乗りを上げることはせぬ。

うん？何故かとな？フハハハ!!我の名を知らぬものはおらぬからよ！

この王の名……ギルガメツシュの名をな!!」

「……突っ込んだらきりがねえぜ、堪えな」

結局名乗っているのだが、と思ったのがどうやら顔に出ていたらしい。

自分も呆れた顔をしている癖に、クーフリーンはそうイレブンを諫める。

すると、ギルガメツシュは、ふと表情を真剣なものへと変えた。

それに合わせて空気ががらりと変わるのを、イレブンは肌で感じたのだ。

まさしくそれは王の気であった。かつて多くの王をその目で見てきたイレブンは、彼らと似たそのオーラに、背筋を伸ばす。

「聞け、勇者よ。

我はあの星を目にしてから、お前の訪れを予感しておった。

しかし……。残酷なことよ……。

まさかこのカルデアが……。あの男が敗れるとは。

……これもまた、運命か」

「おいおい、……運命だと？」

てめえそんなふざけたこと……。」

「ふん、喚くな駄犬。今はその話をする時ではない。

勇者よ……。わかっておるな？」

お前が此処に来た意味は、そこにある」

奥深い色をしたその瞳は、何かを見通しているように落ち着きを

払っていた。

強く頷いたイレブンにギルガメッシュは満足げに笑った。
そして、勇者の隣に立つクーフリーンへと視線を移す。

「それにしても、まさかこんな男に先を越されるとは……」

「はっ。アンタがのんびりしているからだだろうが」

「短慮で短気、それに良く吠える駄犬だが、盾代わりにはなろう。」

無駄にしぶといのだけが取り柄の男には似合いの役目よ。存分に
使え」

「っけ。偉そうに言いやがって」

「我自身がこの目で、見届けられぬのは口惜しいが……。」

「さあ行け！勇者よ！……この先に、管制室に、お前の求めるものは
ある」

にいい、と自信満々に胸を張り告げたギルガメッシュの体は……傷だらけであった。

特に腹部の傷は大きく絶えず血が滴っていた。ギルガメッシュがその姿を現した時はもう、体の半分以上が消えかかっており、本人が言うように致命傷を負っていたのである。

そんな傷も痛みもおくびにも出さず、彼は高らかに笑いそして告げた。

「——またいずれ、まみえようぞ」

最後に聞こえたその言葉は、誰に向けられたものであったのか。

ふと消えていったギルガメッシュに、クーフリーンは一息を吐いただけであった。

「これで俺以外は全滅ってわけだ。

おいおい、そんな顔すんなよ。

全滅っていつても、死んだわけじゃねえ。

俺たちは英霊だ。座に還るだけさ」

そう言ってクーフリーンは、目を閉じる。
その姿は、まるで祈りのようにも見えた。

「……管制室はこっちだ」

クーフリーンは杖を手にすると、とある方向を指し示した。

求めし者たち

クーパーリンの背中を追うようにして行き着いた場所は、施設内で最も酷い有様であった。

跡形もなく破壊され、荒れ果てた管制室は最早見る影もない。

そのような中で唯一、軋みながらも何とか動き続けるものがあった。

「……ああ。そいつか？」

そいつは、疑似地球環境モデルだ。通称カルデアス。

惑星の魂をそのままコピーした文字通り地球の複製さ。

……そうか、お前さんは何も知らねえんだよな。

めんどくせえが仕方ねえ。一から説明してやるから、途中で寝るんじゃないぞ」

ぎぎぎぎ、と音を立てる球体は、燃え滾るマグマの塊にも見える。

真つ赤な色をしたそれを見上げたイレブンの横で、付いた杖に凭れたクーパーリンは彼の横顔に視線を移すと、揶揄うように言った。

「此処は、人理継続保障機関フィニス・カルデア。

そんな堅苦しい呼び方をしてるヤツはいねえがな。

このカルデアは、未来における人類社会の存続を保障する役目を担っているな。

これがまた説明すると長えし、俺はただの英霊だ。

細けえことは知らねえよ」

クーパーリンは、まあお前さんがどうしても聞きたいなら、また今度話してやるよ。と、からからと笑った。

細かいことは知らない。といったわりには、その瞳は深い色を宿しているようにも見えたが、イレブンは何も言わなかった。

「それで……問題はこっからだ。

簡単にいうと、カルデアでは未来の人類史を観察していな。

その観察の中何者かによる歴史介入で人類史が焼却するなんていう、最悪の事象が発見された。

これに対応するために、原因を見つけ出し破壊するための策を講じたってワケさね。

……それが今のカルデアの目的だった」

クーフリーンもまた、話しながら今までの足取りを振り返っているのだろう。

遠くを見るようなその瞳が、全てを物語っているようであった。

イレブンは真剣にその話に耳を傾けていたのだが、また視界の端を白い何かが過った。

つつい目線をそちらへと移すと、そこには長い腕を引き摺るようにして歩く、ヨツチの姿があった。

ゆつくりと歩いていくそれは、クーフリーンの体をよじ登るとその頭の上に乗る。

そしてきよろきよろと周りを見ると、長い腕を動かした。

その腕が指し示したのは……なんと、カルデアスであったのだ。

「……それで、最後のマスターとなった藤丸立香って人間が……」

っってお前さん……今の話聞いてたか？」

真っ直ぐにカルデアスを指し示したヨツチを凝視してしまったことが、バレたらしい。

青筋を立てたまま笑ってみせるといふ器用な表情をするクーフリーンに慌てて視線を戻す。

「ったく、ぼんやりした勇者サマだぜ。

それで今の話、もう一度聞くか？」

心非ずな様子を見抜かれてしまったのだろう。

クーフリーンは、呆れた顔で文句を口にしたが気遣うようにそう付け加えた。

それに首を横に振ったイレブンは、カルデアスへと近付いていく。

「おい、あまり近付くなよ。

そいつは……って、聞いちやいねえ！」

彼の突飛な行動に慌てたクーフリーンは、制止の声を上げるとその腕を掴んだ。

それもそうであろう。カルデアスは、高密度靈子の集合体であり、次元が異なる領域でもある。人間が直接触れてしまえば、分子レベルにまで分解されて消滅してしまうだろう。

クーフリーンの頭に乗るヨツチは、カルデアスを指し示していた腕を振り下ろす仕草を見せた。

要するに叩き切れということだろうか。掴まれた腕をそのままに、イレブンはカルデアスを見上げる。

その答えは直ぐに出た。

イレブンの手の甲の紋章が、光り輝き始めたのだ。

それに呼応するように剣もまた、光を纏う。

「……こいつは、まさか……」

クーフリーンはその眩い光に目を細めながら、とある伝記の一節を思い出していた。

——竜の紋様を持つ勇者は過ぎ去りし時を求めて、再び時を遡った。

全てを断ち切ることの出来る力を持つ勇者のみが、時を越えることができる——

伝記によると、勇者は勇者のつるぎで時のオーブを打ち砕き、過ぎ去りし時を求めた。

時のオーブに関する詳細は書かれていないが、まさかこのカルデアスとその役目を担えるともいえるのだろうか。

「……。そうか、あいつが言っていたのは」

イレブンが成そうとしていることに気付いたクーフリーンは、目を伏せた。

人類最後のマスターを失ったこの世は、このまま闇に呑まれる運命にある。

そんな世界に降臨した勇者は、まさしく救いの光だ。

人類史を守るのがマスターリツカであるならば、世界そのものを守るのが勇者の役目。

隣に立つイレブンは、カルデア陥落の原因となったものと戦う運命をいく覚悟を決めた。だからこそ、彼は時を遡ろうとしているのだろう。

クーフリーンは、彼の顔に視線を移す。

その瞳に宿る光を見ると、力が湧き上がって来るような気がするのだ。

心の奥底で何かが震えている。段々と大きくなっていく衝動は、今すぐにでも叫び出したくなるほどに、強力なものであった。

——希望の光。

己の心の中に燻り燃え上がり始めた炎の名を、クーフリーンはそう呼んだ。

柄でもないことはわかっていたが、再び立ち上がる力を与えた光に、付いて行きたいと思ったのだ。

「……ああ。わかってるさ」

自分を見るイレブンの瞳を、クーフリーンもまた見た。

何処までも真っ直ぐな、その瞳。

マスターであるリツカも、そんな瞳をしていたことを思い起こさせ

る。

出会って間もないが、クーフリーンもまたその光にすっかり魅せられてしまったのだろう。リツカが背に守るべき存在であるならば、イレブンは肩を並べるべき、いや並べたいときえ思う存在である。手に槍がないのが惜しくて堪らない。もし己が朱槍を手にしていたのなら、勇者の槍となり勇者の傍で存分に振るうことが出来たのだろう。考えただけでも、体中に武者震いが走った。

「お前さんは、本当にそれで良いのか？」

その衝動を抑え隠し、静かな声でクーフリーンは問い掛けた。

自分でも何故かわからないが、そう問わなければならぬ気がしたのだ。

「……そうか。アンタがそう決めたんなら、俺が口を挟む筋合いはねえな」

力強く頷いたイレブんに、クーフリーンは笑った。

そして剣を引き抜いた彼の横に立つ。

「なに不思議そうな顔してやがる。

お前さんに全部託す気はさらさらねえ。

てめえの世界はてめえで守らねえとな。

いくら伝説の勇者サマにでも、これは譲れねえ」

に、と意地悪く笑うクーフリーンに、イレブンは目を瞬かせた。

「ははっ、鈍い野郎だな。

俺は導きの杖だ。杖なくして何処に行こうってんだ？

付き合ってやるよ。お前さん勇者にしちゃ、ぼんやりしてて危なっかしい。見てらんねえよ」

もしかして付いて来る気なのだろうか。とイレブンは慌てた。だが時を遡ることは、勇者にしか許されていないのだ。

英霊という存在がどのようなものかを、彼はまだいまいち良くわかっていないが、かつての仲間たちですら不可能であったことが出来るようには思えなかった。

そんな彼を見通したように、クーフリーンはまた言葉を紡ぐ。

「そりゃあ問題ねえさ。」

今の俺はアンタの魔力で構築されている。謂わばアンタの装備品と同じ扱いきさ」

どういふことだろうか、と首を傾げたイレブんに、呆れた顔が返される。

「おい、まさか無意識でやってのか？ 未恐ろしいヤツだぜ。」

無自覚でこんなイイ男をモノにしちまうとはな。

……まあ良いさ。俺もマスターの敵討ちをしなきゃならねえ。

目的は同じさね。付き合ってくれんだろ？」

反論は認めないと言わんばかりに、赤の瞳が生き生きと輝いた。

マスターと英霊の関係はきつと、自分とあの仲間たちのような関係に等しいのだろう。

少し意味合いも異なるだろうが、クーフリーンの話を聞いていると、イレブンにはそう思えたのだ。

自分だって、仲間を害すことは許さない。

自分だって、仲間のために時を求めた。

ならばどうして、クーフリーンの思いを拒むことが出来ようか。

イレブンの青い瞳と、クーフリーンの赤い瞳が交差する。

秘めた思いはきつと同じなのだろう。

今は、それだけで充分であった。

「……さあ、ひと思いにやってくれや。勇者さま」

差し伸べられた手を取ると、クーフリーンは柔らかく笑う。
どうしてだろう。その笑い方が……重なった。

竜の紋章と、勇者のつるぎに呼応するかのように、カルデアスもまた光り輝き始めた。

イレブンはつるぎを胸の前に構え、空へと掲げる。

——そして勇者は、その剣を振り下ろした。

罅が入る暇もなく砕け散ったのは、カルデアスだけではない。

勇者のつるぎもまた、音を立てて折れたのである。

ぱあと広がった光の帯が、二人を包み込む。

その光に融けるように、互いの姿が霞んでいく。

「——イレブン……!」

その声が一体、誰のものであったのか。

薄れていく意識の中で、彼を呼ぶ声だけが木霊した。

始まりの試練

次に目を覚ましたのは、何処か見覚えのある気がする建物の前であつた。

白亜の壁に囲まれたその建物は、太陽の光を艶やかに照り返している。

至る所からざわざわと人の声が聞こえ、先程までいた場所とは全く違う明るさがそこにあつた。

ぼんやりと鈍い頭を軽く振ると、周囲を確認する。

しかし、あの鮮やかな青い髪は何処にも見当たらなかつた。

そうして周囲の様子を窺っていると、イレブンから少し離れたところで、何やら魔法使いが装備するようなローブを身に纏つた人間の集団が、次々と建物の中に入っていくのが見えた。

穏やかな風に揺れるそのローブからは、薄らと魔力のようなものを感じる。どうやら防御力よりも見栄えを重視した装備らしい。この辺りでは強い『まもの』は出ないのだろうか、彼らの装備を見ていた彼は、ふと気付いた。人のことを言っている場合ではない。あの勇者のつるぎを失つた今、彼は丸腰なのである。

取り敢えずイレブンは、周辺を探索することにする。

新しく訪れた土地に心躍らせながら探索を行うことは、冒険の醍醐味の一つでもある。

あわよくば、何か良いものが見つかるかもしれない。

そう考えたイレブンは、建物の輪郭をなぞるように歩き始める。すると、壁の傍に整列しているツボを見つけた。

例によつてそのツボを割っていくと、中からなんと『どうのつるぎ』が出て来た。

名前通り銅で出来たその剣は、冒険初心者向けの良く言えば扱い易い、悪く言えば攻撃力の低い剣であつた。しかし今は、選り好みをしている場合ではないのでさっそく装備する。

丸腰である彼には、攻撃力の低い剣であっても無いよりはマシだ。

武器や防具は装備しなければ意味がないのである。そもそも急に目醒められさせたイレブンは、かつての旅で集めた装備品を持っていなかった。

何故か勇者のつるぎは手にしていたが、その他の武器も、盾も、アークセサリーも置いてきてしまったのである。彼にとつてこれは中々にシヨックなことだが、また集めれば良いと気を持ち直す。

「やあ、ようこそカルデアへ。」

君はミツシヨンの参加者かい？受け付けはあつちだよ」

「はああ、もう何徹目か分からなくなって聞いた……。」

まあ今日が無事に終われば、心置きなく眠れるさ」

「……。お前は……見ない顔だな。」

一般採用者か？ふん、雑魚が。」

お前がこの僕に話し掛けるなんざ千年早いなだよ」

どうのつるぎを背にイレブンは、細やかな探索を行いつつ話を聞いて回った。

ノリ良く雑談をしてくれる者もいれば、素っ気ない者もいる。それはいつものことであるので、気にせず話して掛けていく。

得られた情報はこの建物がカルデアということと、今日は何か特別なイベントがあるらしいということ。そして此処に集まった人間たちは、魔術師が殆どであることだ。

集められる情報はこれぐらいであろう。そろそろ入り口の方に移動しようとしたイレブンは、ふと緑の帽子を被った糸目の男が目に入った。そして、それはその男の方も同じであったようだ。

緑のコートを翻し、品の良い足取りで男は近付いて来た。

「君は……そうか、今日から特例で配属された新人さんだね。」

私はレフ・ライノール。ここで働かせてもらっている技師の一人だ。

君の名前は……？」

新人とは何のことだろうかと思いつつ名を告げると、レフと名乗った男は人好きする笑みを浮かべた。物腰の柔らかい、人当たりの良い男である。それがイレブンのレフに対する第一印象であった。

「ふむ、イレブン君と。」

招集された48人の適正者、その最後の一人というワケか。

ようこそカルデアへ。歓迎するよ」

カルデア、という言葉はクーフリーンからも聞いたが、イレブンの目の前にあるこの建物のことであり、あの朽ちた建物の元の姿であるらしい。

あの崩れ落ちた瓦礫の山とは比べ物にならない姿に、ただ黙って彼はカルデアを見上げた。

「受け付けはまだ済ませていないようだね。」

こちらへ、私が案内しよう」

掌を上にして、まるでエスコートでもするようにイレブンに道を示したレフは、先を歩き始めた。

未だ状況は把握できていないが、今は付いて行くしかないであろう。

カルデアの説明を今度はレフから聞きながら、長い廊下を歩いていく。

「今回君は異例の特例での採用となったんだ。」

大まかにいうと、一般枠と特別枠があつてね。

一般枠というのはまあ、数合わせさ。

特例とはどんな意味って？ははっ、それは後でのお楽しみさ」

レフとのそれは、会話というよりも一方的に聞かれたことを答える

だけであつたので、イレブンの頭の中にはずっと疑問符が飛び交つていた。レフの話の話を聞いていると、自分は何かに採用されてこの施設を訪れることになっていたらしいが、全く以て記憶にないことである。かつて時のオーブを壊した時は、時が戻り過去へと飛んだ。

ならば今この場所は、先ほどいた場所の正当な過去の姿なのだろうか。

色々と情報不足であるため、それすらも判断のしようがない。

クーフリーンが一緒ならわかつたのかもしれないが、彼の姿は何処にも見当たらないのだ。

前途多難とはこのことである。などと考えている間にも、レフの話は続いた。

「魔術の名門から38人、才能ある一般人から9人……そして君だ。

なんとか48人のマスター候補を集められた。

これは喜ばしい事だ。この2015年において霊子ダイブが可能なら適正者すべてをカルデアに集められたのだから。わからない事があつたら私に遠慮なく声を掛けてくれ」

前記したように、レフはとても親切な男である。

しかし、彼の説明は、イレブンが知りたいこととは微妙にズレてしまっているのだ。

それを質問しようとしたが、タイミングの悪いことにもう目的地に着いてしまったようであつた。

受付に座っていた女性にレフが話し掛けると、イレブンは何かの装置が並ぶ部屋へと通された。

イレブンが装置の前に立つと、直ぐにそれは作動し、ぴぴぴと何かを読み込むような音がした。

——塩基配列 ヒトゲノムと確認

——霊器属性 ……判定不可能

ようこそ、人類の未来を語る資料館へ。

ここは人理継続保障期間 カルデア。

指紋認証、生体認証、遺伝子認証 クリア

魔術回路の測定……。エラーが発生しました。

魔力回路の測定……。エラーが発生しました。

魔力回路の測定不可能。次の段階へ移ります。

登録名と一致します。

貴方を霊長類の一員である事を認めます。

はじめまして。

貴方は本日 最後の来館者です。

どうぞ、善き時間をお過ごしください。

……申し訳ございません。

測定不可能項目が存在したため、処理に時間を要します。

入館手続き完了まであと***必要です。

その間、模擬戦闘をお楽しみください。

レギュレーション：シニア

契約サーヴァント：セイバー ランサー アーチャー

スコアの記録はいたしません。

どうぞ気の向くまま、自由にお楽しみください。

英霊召喚システム フェイト 起動します。

***の間、マスターとして善い経験ができますよう。

黒く塗り潰されていた視界に、突然色が戻る。

建物の中にいた筈だが、目の前には青々とした草原が広がっていった。

移動魔法でも使ったかのように、突然場所が変わったことに驚きを隠せないイレブンであったが、敵の気配を察知すると素早く背負っていた剣を抜いた。

先ほども言ったが、どうのつるぎ、という名の通り銅で造られた赤茶色の剣は、所謂初期装備の一つである。要するに大して攻撃力はな

い。が、扱う者は熟練した勇者であり、剣を極めた者である。それが『丁度良いハンデ』となろうことは相手の顔を見て感じた。恰好付けて言うと、長年の戦いの勘というヤツである。

現れた敵らしきものは、闇の騎士のように、真っ黒な体を持った騎士であった。

シルエットそのものが具現化したようなものであるので、それが本当に騎士なのかもわからない。

邪悪さを垂れ流す赤の瞳が殺気立っている。本物の影のように地面から現われたそれらは、あつという間にイレブンの周りを囲ったのである。

—エラー発生。エラー発生。

緊急事態発生。緊急事態発生。

英霊召喚システム フェイト に重大なエラーが発生しました。

契約サーヴァント召喚 不可

システムの終了 不可

契約者の安全が 保障できません

突如けたたましい警告音が鳴り響いた。

良くはわからなかったが、システムに異常があったらしい。

だがそれを気にする余裕はない。イレブンは襲い掛かって来た敵の攻撃を躲すと、出来た隙を突いて剣を振り抜く。するとあっさりと消えていくそれと入れ替わるように姿を現した新手に、再び剣を構え直した。

——イレブン君！無事かい!?

ボクは医療部門のトップ、ロマニ・アーキマン。

なぜかみんなからDr. ロマンと略されていてね……って自己紹

介は後にしよう。

すまないが、アナウンス通りだ！

システムにエラーが発生した挙句、緊急停止した。

くそ！こんなこと今までなかったのに！

落ち着いて聞いてくれ。

契約サーヴァント召喚は行えない。

でも、シミュレーションは続行される。

ということは、だ……。

システム通り敵は出現するが、サーヴァントは召喚されない。

今急いで予備システムを起動させ連結させている。

制御が行えるようになれば、直ぐにシステムを中止させられるだろ

う！

……すまない、こちらからでは君のサポートを行うことはできないんだ。

アナウンスが機械的なそれから肉声へと切り替わる。

若い男の声は焦りに満ちていた。

それ故か口早に、それでいて簡潔的確に事態を告げた。

その男の話からするに、これは絶望的な状況ということだろう。

仲間はず、敵は容赦なく襲い来るということだろうか。

ならば呪文は控えめに、物理攻撃を中心に攻撃を行うことにしよう。

脳内でさくせんを切り替えたイレブンは、飛び掛かって来た敵を躲すと剣で背中を切り裂いた。

この時ロマニの焦りと、イレブンの考えには少し……。いや大分ズレが生じていた。

要するに、流れるような剣捌きで、容赦なく敵に切り掛かるイレブ

ンは、このシミュレーションが何のためにあるのかを全く理解して
いなかったのである。

交差する運命

濛々と沸き立つ闇のオーラを纏いしもの。

その手には、剣、弓、槍がそれぞれ握られている。

周りを囲まれてしまい、逃げることは不可能であろう。

そもそもこの閉鎖空間において、逃げるという選択肢は元から存在しない。

いつ助けが来るかはわからないので、魔力を節約しつつ剣を振るうことにしたのだが、すぐにそうは言っていられなくなる。レベルの差もあるのかはじめは剣を一振りすれば、それらは消えていったのだが、どうやら敵を倒せば倒すほど強くなっているらしい。段々と苦戦を強いられるようになってきたのだ。

まものとは違う、それらを相手する中で、イレブンは気付いたことがある。

特に弓を持った敵相手には攻撃が通りにくく、倒すまでに時間が掛かってしまう。

それとは逆に、槍の相手に対してはダメージが多く与えられているらしく、攻撃が容易であった。

ほのおを操るまもの、特にこおりの呪文が良く効くように、そういう法則があるらしい。

隙を突いて飛んで来る弓を躲し、薙ぎ払われる槍を弾いて、接近していた剣と鬩ぎ合う。

そうしている間に、新手が何処からともなく現れるという最悪な状況であった。

こうなっては出し惜しみをしている場合ではないだろう。

イレブンは大きく後ろへと跳躍すると、一つ息を吐いた。

そして精神を集中させると、己が一番得意とする呪文を唱え始めたのである――。

その日は、カルデアにとって特別な日であった。長年に渡り築いて来たものがやっと、形となり動き出そうとしていたのだ。

特にカルデアを束ねる彼女にとっては、待ち望んだ時であると同時に、その肩に押し掛かる重圧を改めて感じる日でもあった。

その任務に集められたものは、47人。

魔術師の名門から一般人に渡り、とある適性を持つものたちの全員がカルデアに集結していたのだ。

カルデアの職員たちは大忙しであった。

集合時間の数時間前から、一人ひとりとやって来る適性者に対して、一通りのシミュレーションを行い、中央管制室へと案内をする。名の知れた家の出の者たちに対して気を遣わねばならないし、本日の日程が円滑に行えるようにと準備もしなければならぬ。水面下の激闘とはこのことかと、誰しもが走り回っていた。

カルデアの組織はいくつかの部門にわかれている。

特に優秀なものたちがそのトップに立ち、カルデアの運営に尽力していた。

その中の一角を担うロマニ・アーキマンは、医療部門を統括する存在であった。

彼のこの日の担当は、メインは体調不良者への対処で、サブとしてレイシフトの補助となっていたので、比較的時間に余裕があったのである。

管制室やら医務室やらを行き来していたロマニであったが、突然血相を変えて乗り込んできた技術師レフに事態を知らされた。ばん！と開け放たれた扉に、ロマニが驚きのあまり手にしていたカップからコーヒーが毀れたと同時に、アナウンスは鳴り響いた。

——エラー発生。エラー発生。

緊急事態発生。緊急事態発生。

英霊召喚システム フェイト に重大なエラーが発生しました。

契約サーヴァント召喚 不可
システムの終了 不可

契約者の危険が 保障できません――

「な、な……なんだって!？」

「ロマニ、聞いた通りだ。」

私が彼を案内したのだが、システム フェイトに何かしらのエラーが生じた。

英霊が召喚できていない!このままでは……!」

「つ……その子の身が危ない!!」

直ぐにシステム管理室へ……!」

マスターは基本的に非戦闘員である。

魔術師であれば多少の魔術は使えるため身は守れるが、相手が英霊となると話は別である。

歴戦の戦いを駆け抜けた彼らに、生身の、しかも戦いを知らない人間が挑むのは無謀な話だ。

そもそも英霊以上に戦えるマスターがいるのならば、聖杯戦争に英霊は必要ないだろう。

そんなバランスクラッシャーが存在するとすれば、即制裁措置が取られる可能性だってあるのだ。

まだ説明会も始まっていないのに、貴重な適性者の一人を失うわけにはいかなかった。

もちろん、ロマニだって無駄な犠牲を望んではない。

慌てて医務室を飛び出したロマニは、レフと共にシステムを制御している部屋へと急ぐ。

部屋に入るとシステムの異常を知らせる警告音が幾重にも響き渡っており、職員たちが大慌てで対応のために奔走していた。

ざりざりと音を立てるモニターには、何も映っておらず、システム内の様子を窺うことはできない。

ロマニとレフはそれぞれ職員たちに指示を飛ばすと、自分たちも機械の前に座り、キーボードを叩いた。

——システムへ接続を行うためのコマンドが入力されました。

英霊召喚システム フェイト へ再接続を行います——

それから更に時間が経過し、停止していたシステムの一部が起動し始める。

すると砂嵐状態で何も映していなかったモニターが、点滅を始めた。

システム管理室にある巨大なモニターは、行われているシミュレーションを映し出すものである。

そのアナウンスが流れると、部屋中の職員がモニターへと注目した。

もしかしたらもう——死んでいるのではないか。

彼らの優秀な脳は、このシステムエラーがどんなに絶望的状态を生み出していたかを弾き出している。

誰しもが口には出さないものの、システム内の適性者の生存率は高くはない……。いや、絶望的だと思っていた。

ロマニがキーボードを叩く度に画面が揺れ動き、次第に何かを映すようになっていく。

白と黒に点滅を繰り返したそれは、ついにシステム内を映し出したのだ……。が、その瞬間であった。

「うわっ!？」

「きゃあ!？」

形容しがたい轟音が鳴り響いたかと思うと、モニターが真っ白となった。

ばちばちばち、と何かが感電するかのような雷鳴にも似た音が尾を引く。

予期せぬ轟音と光に職員たちは悲鳴を上げ、目を瞑る。

不意打ちを食らい、眩んだ眼が正常に戻ったのは……しばらく後の話であった。

「——なっ!?……ま、……まさか、」

それを見たとき、ロマニは驚きのあまり椅子から転落した。

だが落下の衝撃などとは比べ物にならないほどの衝撃が、彼を襲っていたために、痛みなど感じなかった。後ろにひっくり返り尻もちを付いた体勢で、ロマニはモニターを見上げる。

穏やかでマイペースな彼は表情豊かであるが、動揺を見せても直ぐに立ち直る強さを持っていた。それだけ頭の処理速度が速いということでもあろう。

しかしその震える声も、手も、直ぐには治まらなかった。どくどくと煩い自分の心音だけが、彼の耳に聞こえていた。

レフをはじめとする職員たちは、心配げにロマニへと声をかける。しかしその声は、彼に届くことはない。

「っーい、今すぐ……システムを……」

システムを終了させるように指示を出そうとしたロマニは、ふと気が付く。

——全ての敵の殲滅を確認。

シミュレーションを終了します。

おつかれさまでした。

このまま電源をお切りください――

「う、うそ……だろ……?」

英霊が召喚されたデータはないぞ。

まさか、この適性者……」

「えええー！この子が倒したっていうの!？」

そんなの前代未聞よ!？」

「……この適性者のデータは?」

「は、はい、こちらです……レフさん」

「……。これが……特別枠、か」

システムの完了。

それはシミュレーションが終了したということ、引いては敵として出現するエネミーを全て倒したということである。しかし一体、どうやって……。と職員の間には動揺が広がっていく。

そんな中でも、職務を全うしようとする職員は、アナウンスに従いシステムの電源を適切に切った。

「Dr. ロマン、だいじよ、って……!ど、どちらへ……!？」

呆然としていたロマンは、はっと意識を取り戻すと急いで立ち上がる。

その姿を見た職員が声を掛けると、彼はそのまま部屋の外へと飛び出していった。

「……ふん、……悪魔の子が、」

職員たちは首を傾げながらも、システムの再チェックのため各々の作業へと戻っていく。

ふわりと、揺れたその白衣を、とある男が黙したまま見送った。

唱えた呪文は、全体攻撃が可能である^{グルーブ}デイン系の魔法の最上級に位置する、ギガデインであった。それを容赦なくぶっ放した勇者は、誰もいなくなった草原に一人佇んでいた。

切り札といっても過言ではない雷の攻撃は、無限のように湧き出てきた敵たちを一掃したらしい。

ばちばちと、地面に残る余波がその威力の大きさを伝えていた。

敵の気配が途絶えたことを確認したイレブンは、剣を納めた。

すると、それとほぼ同じくして目の前がぐらりと揺れる。

——全ての敵の殲滅を確認。

シミュレーションを 終了します。

おつかれさまでした。

このまま電源をお切りください——

機械的な声が告げたその言葉に、イレブンはシミュレーションが終わったことを理解した。

結局呪文を使ったのは一回だけであるので、まだまだ魔力は余っている。

節約しすぎるのも効率を悪くし、悪手になることも多々あるので、その調整は非常に難しいところだ。

そんなことを考えていると、イレブンは再び転送魔法^{ムラ}を使った時のような感覚に襲われた。

目を開けるとそこは受付を行った場所で、どうやら元のところに戻って来たらしい。

ただ異なるのは、人ひとりいなくなっているところであろうか。

目に眩しい白い壁と床に覆われた一室は、しんと静まり返っていた。

どうしようかと、イレブンが周りを窺っていると、遠くから足音が聞こえた。

ばたばたと慌ただしいその音を聞いているだけで、相当急いでいることがわかる。

なんと、その足音は段々とイレブンの方へと近付いてくるのだ。

だだだだだ……—ばんっ！

その勢いのままに開かれた扉の、その向こうから柔らかな桃色の髪をした一人の男が現れたかと思うと、その男は足早にイレブンへと駆け寄る。息を荒げながら肩で息をするその様子から、相当な距離を走って来たのだということがわかった。

イレブンは、驚きながらも心配げにその男を見た。白衣を着た若い男に見覚えはなかったが、男の方はイレブンを見るとその目には驚愕を浮かべた。

「……、……」

男は、何かを言おうとして止め、そしてまた何かを言おうとしてぴたりと口を噤んだ。

そして何度か視線を彷徨わせると、大きく息を吸って吐く。

「や、やあ、イレブン君。すまなかったね。

何せシステムが異常停止するなんて前代未聞だったから、対応が遅れてしまったんだ。

正直もう間に合わないかと思ったけど……。ああ、よかった……。

あ、ご、ごめん。僕はロマニ。

そう、一度君に通信を送ったDr. ロマンさ」

高い位置で結んだ、ももんじやのしつぽのようにふわふわとした髪

が乱れている。

優しいな雰囲気を漂わせるロマニは、ふんわりと笑った。

医療部門のトップと言っていたが、まさかこんな若くてふわふわとした男だとは……。とも思ったが、よくよく今までのことを思い出すと、位が高いものほど自由だったり、個性であつたり、茶目つ気が強かったりするものである。

「君にはほんつとうに申し訳ないんだけど……。

説明会はもう始まっているんだ。

今から行っても所長のご機嫌を損ねるだけだろうし、君も疲れただろう？

部屋まで案内するから休んでいてくれ」

ぱん、と胸の前で手を合わせると、ロマンは頭を下げた。

良くわからないがその説明会とやらは、イレブンがシミュレーションを行っている間に始まっていたらしい。イレブンは一つ頷きながらも、ロマンへ問い掛けた。

「説明会に参加しなくても大丈夫なのかって？

問題ないさ。あれはちよつとしたパフォーマンスだからね。

それに、元々はこちらの不手際だ。君は何も悪くない」

眉を下げながらも一度頭を下げようとしたロマンを、イレブンは慌てて止めた。

そもそもイレブンは、イレギュラーの存在であるのだ。謝られる方が申し訳なくなってしまう。

「う……うう、なんて君は、優しいんだ……。

これが彼女だったら、罵倒という罵倒をして、僕のコレクションを……。

……！ い、いや何でもない。

では君の部屋へ案内しよう。付いて来てくれ」

感極まったような仕草と共にぱつと顔を明るくしたロマンは、くると身を翻した。

そして一度振り返ると、イレブンに向けてそう告げたのである。

「さ、これが君の部屋だ。自由に使ってくれて構わない。

ああでも偶には僕の休憩所として使わせてくれると大変うれしいんだが……。

……本当かい!?ありがとう、イレブン!!」

案内された先は、必要最低限のものが置かれたシンプルな部屋であつた。

軽い足取りで中へと入ったロマンは、そのまま慣れたような足取りで椅子へと腰掛ける。

「え?仕事は良いのかつて?」

ふふ、僕の話聞いてくれるかい?

もうすぐレイシフト実験が始まるのは知っているだろう。

スタッフは総出で現場にかり出されている。

……けどボクはみんなの健康管理が仕事だから。

正直、やるコトがなかった」

話し相手を探していたのだろうか、と思うほど満面の笑みでロマンはイレブンに話始めた。

「コファイ霊子筐体に入った魔術師たちのバイタルチェックは機械の方が確實

ではあるんだけど……。偶にあのシミュレーションを受けただけで体調不良を起こす子もいるからね。医務室で一応待機はしていたのさ。まあ暇だったけど。

でも、そんな時で良かったよ。まさかあのシステムが異常を来すなんて……。

……最後の来館者が君で良かったよ」

本当に慌てたんだから、と溜息を吐いたロマニははつと表情を変える。

「ああ誤解しないでくれ、戦える君が最後の来館者で良かったって意味さ。

心臓が止まりそうになったけど……。君が無事で良かった。

でもこれもまた運命なのかもしれない。……いや、なんでもないさ。気にしないでくれ。

さて、所在ない同士、ここでのんびり世間話でもして、交友を深めようじゃないか……。と言いたいところだけど、それはまた後にしよう。ゆっくりと体を休めた後、お茶会でもしようじゃないか」

見るものを安心させるようなふんわりとした笑みは、彼に良く似合っている。

一通り話をしたロマニは、医者らしくイレブンの健康をチェックすると、しばらく休むようにと言った。イレブンにはまた別途に説明があるらしいので、その言葉に甘えて休んでおくことにする。

「暫くしたら起こしに来るから、気にせず休んでくれて構わないよ」

機嫌良く白衣を揺らしたロマニは、小さく手を振ると部屋を出て行った。

残されたイレブンは休める時に休んでおこうと、置かれたベッドに身を横たえる。

もう少し詳しく話を聞きたかったのだが仕方がない。目が覚めたら、ロマニのもとに行こうと決めて、彼は目を閉じた――。

――(こそ、(こそ(こそ……(こそ、

物音が聞こえ、イレブンは目を覚ました。

何かを漁っているような音に聞こえたため、物取りかとも思ったが、漁ることの出来る量の荷物を持っていないことを思い出す。それならば何だろうと体を起こそうとすると、毛布の下つまりイレブンの体の傍で、何やら生温かな何かが動いているのを感じた。

虫などのように固い感触ではない、そのあたたかく柔らかな感触は、猫や犬のようなそれである。

目を凝らすと何やら膨らみのようなものが見え、もぞもぞと蠢いていた。

イレブンは意を決して毛布を捲ることにした。

そつと毛布の端を掴むと、ゆっくりと捲っていく――。

するとそこには……。

「にゃー」

なんと……むじやきにじやれる、猫がいた！

黄色の毛皮に、黒い斑点。鮮やかな赤いたてがみ……。

それはイレブンにとつて見覚えのあり過ぎる生き物である。

彼の両手に収まるサイズのそれは、ベビーパンサーと呼ばれる『まもの』であったのだ。

過去より来る

ごろごろと喉を鳴らす猫のような『まもの』ベビーパンサーは、見
ての通り人懐っこく、その愛らしく小さい見た目とは逆に義理堅い一
面を持つ。小さい頃から育てると大きくなってもその恩を忘れない
という性格で、人間と『まもの』は基本的に相容れないが、その可愛
らしい姿と懐きやすい性格は密かに人気であった。

「にゃー……ゴロゴロゴロ、」

シーツに背中を擦り付け腹を見せながら、むじやきにじやれるベ
ビーパンサーに、敵意はなさそうだ。

イレブンはその小さな体を持ち上げると、枕元に転がす。
そしてそのまま再び眠りについた――。

ぐと、腹部を柔らかいもので押され、段々と強くなっていくその圧
迫感にイレブンは目を覚ました。

目を開けてその方向を見ると、枕元に移動させた筈のベビーパン
サーが、彼の腹の上にあった。

ふみふみと足を動かして何かを訴えているようにも見えるが、流石
に『まもの』の言葉を理解することはできない。人の言葉を話す『ま
もの』も中にはいるが、『まもの』の言葉を話す人間はそうはいないだ
ろう。

ぱつちりと開いたベビーパンサーの顔を見る。

するとその尻尾が激しく揺れたかと思うと、ベビーパンサーは勢い
良くイレブンに飛び掛かった。

「にゃあ」

顔面に張り付いたベビーパンサーを剥がすと、イレブンは起き上がる。

随分ゆっくりと寝てしまったらしい。ベッドサイドテーブルに置かれた時計に目を移すと、イレブンは身支度を整えた。

イレブンはそのまま部屋を出て、ロマニのもとに行くことにした。しかしカルデア内部の地図を把握しているわけではないので、ロマニのいるであろう医務室が何処にあるかはわからない。部屋数の多い施設内を風潰しに探索するのは些か時間が掛かるだろう。

取り敢えず廊下を歩いていると、やけに人気がないことに気付く。あれだけ騒がしかった廊下も、人一人いないのだ。

「なあん……」

廊下に出たイレブンを、ベビーパンサーが後を追い駆ける。

どうやら懐かれてしまったようである。それにしても、この猫は何処から来たのだろうか。イレブンはその顔を見るも、お互いに顔を見合わせて首を傾げるだけで終わった。

意思疎通が取れない以上、そうしていても始まらない。

こうして、イレブンはベビーパンサーを連れて歩き出した。

静まり返った廊下を抜けると、目の前に大きな扉が見えて来た。

イレブンはその扉へと近付くと、扉へと手を伸ばす……。

しかし、突如後ろから伸びて来た剣先を横目で捉えた時はもう、身体が勝手に反応していた。

「ふん。……何やら忌まわしい気配がすると思えば。

貴様は勇者だな。私の知っている男とはまた違う、光の者か……」

素早く引き抜いた剣で、その剣を弾いた。

きいん、と高い音が打ち鳴らされ、イレブンは後ろを振り返る。

するとそこには、異様な気配を持つ男が立っていた。

190センチ近くはあるであろう身長に、長い銀髪を流したその男の額には赤い鉢巻のようなものが巻かれていた。そうして、男はイレブンの顔をじいっと見ると剣を納める。灰色のスーツに黒いシャツを纏い、黄色のネクタイを締めた男は鼻を鳴らすと、その腕を組んだ。

「何をしている?」

敵意は感じないが、イレブンにはその男が人ならざるものであることがわかった。

男に倣って一応剣は納めたものの、完全に警戒は解いてはいない。

2人の間に張り詰めた空気が流れていた、が突然イレブンは自分の『肩』が軽くなったのを感じた。

「みやあ」

「……! ベビーパンサーだと……!? 何故、ここに」

ぴよんと飛び出したベビーパンサーは、その男の足元になついた。

これに慌てたのは男の方である。信じられないと言わんばかりにその目を見開くと、男はベビーパンサーの首根っこを掴み上げる。空中にぶらりと浮かんだそれは、暴れることなく両手足を引っ込めて大人しくしていた。

「……勇者よ、名は?」

暫くベビーパンサーをじっと睨み、いや見つめていた男だが、ふとその赤い瞳をイレブンに向けた。

「……イレブン。そうか、貴様は、始祖の勇者か」

イレブンの名を聞いた男は一瞬だけ目を丸くすると、何かを納得し

たように頷く。そして片手で掴んでいたベビーパンサーを彼に向つて放り投げた。綺麗な弧を描き飛んで来たベビーパンサーをキャッチすると、男はイレブンに背を向けようとして、足を止めた。

「そいつは腹が減っているようだ。

キラールパンサーの子供とはいえ、まだ幼い。

ミルクでも飲ませておけ。俺はもう行く」

素っ気ないその言葉に、イレブンは目を瞬かせた。

端麗な容姿も相俟って取っ付き難いように思える男だが、根は良いのだろうか。

彼は男を見る。やはりその瞳からは、嫌な気は感じられなかった。

「……私なんだろう？ ふん、つまらんことを聞くな。

それよりも貴様に一つ忠告してやろう。なに、ただの気紛れだ。

——命が惜しければ部屋にいろ」

今度こそ踵を返した男は、それだけ言うて去っていった。

男の残した言葉の意味を何度か頭の中で反復させたが、意味を理解することはできなかつた。

「にやーん」

イレブンは抱いたままであつたベビーパンサーに視線を移す。

男の忠告に従うかは置いておくとして、ミルクは与えた方が良いのだろうか。

部屋に冷蔵庫があつたことを思い出した彼は、取り敢えず部屋へと向かうことにしたのであつた。

「うええええええ!!誰だ君は!!」

ここは空き部屋だぞ、ボクのさぼり場だぞ!?
誰のことわりがあつて入ってくるんだい!?!」

自室に戻るやいなや、悲鳴混じりの叫びを上げられるとは誰が予想していただろう。

その声に驚いたイレブンは思わず一步後退した。

再び肩に登っていたベビーパンサーが、毛を逆立て唸りを上げる。幼いとはいえ獣の威嚇する姿は中々に迫力があり、今まで甘えるような姿しか見ていなかったことも相俟つて、キラーパンサーの子供であることを実感させられる。

「……って、あれ?イレブン?」

此処は君の部屋だよ。あれね?

何を言っているんだろう、僕は……。

すまない、最近徹夜が続いていたからおかしくなっていたのかもしれない」

ぱちぱちと瞬きを繰り返すと、改めてイレブンの顔を見たロマニは眉を下げた。

やってしまったと頭を掻く仕草を見せ、深い溜息を吐く。

この施設で求められているのは優秀な研究員であるため、どうしても少数精鋭部隊となってしまう、慢性的な人手不足に陥ってしまう。なので、ロマニをはじめとするトップのものは、繁忙期になるとどうしても、ブラツクとしか言えない労働環境を強いられることになるのだ。

今日この日を迎えるにあたって、念入りのチェックを余儀なくされたロマニの目の下には、隈が浮かんでいる。

どこか哀愁の漂う姿に、イレブンはそつとその肩を叩くしかなかったのであった。

「にしても、何処に行っていたんだい？」

そろそろ起こそうと思つて部屋に来たら、君がないから驚いたよ。

あれ？君の肩にいるのは……！もしかして噂の怪物かい？

うわあ、はじめて見た！」

そんなイレブンの対応が余程胸に響いたのか、ロマニは自分の置かれていた環境について吐き出すように話し出した。愚痴というには自虐的だが、本人が話したいのならばと話を聞いていた彼に、大分すつきりした顔をしたロマニがそう問う。

そうしてやっとロマニは、イレブンの肩に乗っているベビーパンサーに気が付いた。

ロマニの言う噂の怪物かは何かわからなかったが、気が付いたらベッドの中にいたということを説明する。ついでに廊下であったあの男のこともさり気なく聞いてみた。

「うーん、銀髪の男性ねえ。うちにそんな人いたかなあ。

冷たい印象のクールぶった男だろう？

そんな感じの男ならいるけど、彼は金髪だし……」

じいとロマニを見るベビーパンサーはどうやら、ようすをうかがっているようだ。

威嚇するわけでもなく、かといって懐くわけでもなく、ゆらりと尻尾を揺らす姿に戸惑った表情をしながらもロマニは、イレブンの言った男について首を傾げた。

ちなみに彼は、冷たい印象を受けたとは言ったが、クールぶったとまでは言っていない。

「……でもちよつと気になるね。後で調べてみよう。」

ふわりとした表情を引き締めたロマニは、何やら思うことがあったのか真剣な目でそう言った。

そして静かに思案を始めた様子のロマニであったが、その時通信機がぷつりと音を立てたのだ。

『ロマニ、あと少しでレイシフト開始だ。』

方が一に備えてこちらに来てくれないか?』

「やあレフ、何かあったのかい?」

『ああ、それがな……。』

Aチームの状態は万全だが、Bチーム以下、慣れていない者に若干の変調が見られる。

おそらく、これは不安からくるものだろうな。

コフィンの中はコクピット同然だから』

「それは気の毒だね。」

ではちよつと麻酔をかけに行こうか」

『ああ、急いでくれ。いま医務室だろ?』

そこからなら二分で到着できる筈だ』

「あー。うん、出来るだけ急ぐようにするよ」

『頼んだぞ』

ぷつり、と再び音を立てて通信が切れた。

目の前でその会話を聞いたイレブンは、ロマニを見る。

それに悪戯な笑みを返したロマニは、その唇に人差し指を当てた。

「まあ緊急事態ではなさそうで良かったよ。

ふふっ。少しぐらいの遅刻は許されるよね。

Aチームは問題ないようだし」

突然のレフからの連絡は心臓に悪い、と安堵の息を吐いたロマニは、椅子に座ると頬杖を付いた。

のんびりとした姿勢に急がなくて良いのかと思いつつも、取り敢

えず話を聞くことにする。

「君はあの男に会ったんだよね？そう、レムさ。

彼は優秀な男でね。何を隠そうあの疑似天体を観るための望遠鏡——近未来観測レンズ・シバを作った魔術師だ。シバはカルデアスの観測だじやなく、この施設内のほぼ全域を監視し、映し出すモニターでもある。

ちなみにレイシフトの中枢を担う召喚・喚起システムを構築したのは前所長……。

ああ、難しい話をしてしまったね。兎に角このように実に多くの才能が集結して、このミッションは行われるのさ」

だから今日は絶対に成功させないといけないんだと微笑む。

そうして話し終えると、満足げな顔をしたロマニは立ち上がった。

「僕みたいな平凡な医者が立ち会ってもしょうがないけど、お呼びとあらば行かないとね。

お喋りに付き合ってくれてありがとう、イレブンくん。

落ち着いたら医務室を訪ねに来てくれ。あ、そうだ君、ケーキは好きかい？

うん、良いね。僕も甘いものには目がなくて……。今度ご馳走しよう。

ああ約束だ……」

緩やかな笑みを浮かべたままイレブンの手を握ったロマニは、軽い足取りで扉の方へと歩いていく。

——ぱつと、部屋の照明が落ちたはその時であった。

「なんだ？明かりが消えるなんて、何か——」

不意にに暗くなつた視界に、怪訝な顔をしたロマニが足を止めた。

——どおおおん!!

そう遠くない距離で、何かが爆発した音がしたかと思うと、悲鳴のような声が聞こえてきた。

びりびりと建物に振動が走り、けたたましい警告音が鳴り響く。

——緊急事態発生。緊急事態発生。

中央発電所、及び中央管制室で火災が発生しました。

中央区画の隔壁は90秒後に閉鎖されます。

職員は速やかに第二ゲートから退避してください——

カルデア内の雰囲気は一変した。

無機質なアナウンスが、余計に事態の大きさを伝える。

「今のは爆発音か!? 一体なにが起こっている……!?!」

モニター、管制室を映してくれ! みんなは無事なのか!?!」

焦燥を浮かべたドクターが何かの機器に指示を飛ばす。

すると、壁の上に設置された巨大なモニターが起動した。

鮮明に映し出されたのは、燃え盛る一室であった。

イレブンの部屋よりも広く造られた真っ白な部屋は、爆心地となつたのだろう、壁や床が吹き飛ばされており、瓦礫の下に人間らしきものが見える。滲む赤は血であろうか。

思わずイレブンは息を飲んだが、それ以上に動揺を見せたのはロマ

二である。

「これは――！」

イレブン、すぐに避難してくれ。僕は管制室に行く。
もうじき隔壁が閉鎖するからね。その前にキミだけでも外に出るんだ！」

ロマニは直ぐに冷静さを取り戻し、イレブンにそう指示を出した。
だが彼はそれに素直に従うわけにはいかなかったのだ。
何故なら、此方へと近付いてくる無数の足音に気付いていたからである。

人間ではない、何かの足音。

それを察知したのはベビーパンサーも同じであった。
ぴんと耳を立てたベビーパンサーは、先程のロマニに対してのそれとは、比べ物にならないほどの獰猛な唸り声を上げる。

「いや、なにしてるんだキミ!？」

方向が逆だ、第二ゲートは向こうだよ!？」

まさかボクに付いてくるつもりなのか!？」

そりゃあ人手があつた方が助かるけど……つて……なん、だ……!？」

どンドン、どん!と何かが扉を叩く音がした。

それは叩いているというよりも、殴り付けるような音であつた。
力で扉を破ろうとしているかのような音は、段々と激しさを増していく。

みし……と、扉から嫌な音がした。

イレブンは背中から剣を抜くと、ロマニの前に立つ。そして。

「ぐふっふっふ、見つけたぞ!!人間め!」

「え、ええ、ええええええ!!」

せ、せきぞうが、う、動いてる……!?!」

ばあん!と扉が破壊され、それは姿を現した。

見た目は灰色のせきぞうだが、邪悪な光をその目に宿し、意思を持って動いている。

明らかに『まもの』であったが、ロマニは目の前に立ちはだかるそれに目を白黒させていた。

その反応に、もしかして見たことがない『まもの』なのだろうか、イレブンは内心首を傾げる。

そもそも『まもの』が存在しない世界においては、当然の反応ではあるが、それを知る由もない彼がズレたことを考えてしまうのは致し方ないことだろう。

「あのお方からの命により、お前らの命を頂戴する……!」

せきぞうの後ろにいた、よろいを纏った騎士らしき『まもの』が二体現れる。

そして動くせきぞうと二体のよろいの『まもの』は、おそいかかってきた。

新たなる再会

「い、イレブン……。怪我は、ないようだね。
今のは、なんて聞いている場合じゃない。
話は後にしよう。それで……。その、君に頼みがあるんだ」

熟練の戦い方をする少年だと、ロマニはその背中を見つめる。
まるで、そう……。この時代の戦い方ではなく……。

ロマニはそっと目を細めた。その表情は、今まで見せた表情とは違
う……。鋭いものであった。
しかしもちろんロマニに背を向けて戦うイレブンは、それに気付く
ことはない。

かちや、とイレブンの剣が高い金属音を鳴らし、納められる。
扉の前に立ち塞がっていた『まもの』たちの姿はもうなくなってい
た。

後ろを振り返った彼に、ロマニは心配げな表情を浮かべる。そこ
はもう先ほどの表情は欠片もなかった。

「巻き込んでしまうようですまないが、管制室まで一緒に行ってくれ
るかい？」

イレブンは深く呼吸をすると、気を研ぎ澄ませた。
すると今倒したものと同じ『まもの』たちの気配が至る所から感じ
られる。

おそらくロマニもそれに気付いているのだろう。のんびりしてい
るように見えて、抜け目はないのかもしれない。彼はロマニの頼みに
首を縦に振った。

「ああ、良かった。

情けない話だが……。僕は今戦えないんだ。

君がいてくれて良かったよ」

それは本心からの言葉であった。何故年若い少年が鮮やかな剣裁きが出来たのか、疑問であるし非常に興味深いのだが、じっくり話を
する時間はない。残念だがまた後で聞けば良いだろう。

込み上げる興味を押し殺しているロマニを尻目に、イレブンは部屋の外を覗いた。

そこには生存者を探しているのだろう『まもの』たちが廊下を巡回している。

視界を遮れるような障害物は見当たらないので、隠れながら進むというわけにもいかなそうだ。

部屋で待つようにロマニに言うと、イレブンはまず廊下に蔓延るそれらから倒していくことにした――。

「……生存者はいない。無事なのはカルデアスだけだ。

ここが爆発の基点だろう。これは事故じゃない。人為的な破壊工作だ」

幾多の『まもの』を切り捨てて、漸く辿り着いた先は、赤に染められていた。

爆発に伴う炎だろうか、それとも犠牲となった人間の血だろうか。

目にこびり付いて離れない赤を見つめ、立ち尽くすイレブンの横で、ロマニは冷静に分析を続ける。

そんな惨劇の中心で、尚も動き続けるカルデアスが彼の眼には異様なもののように映った。

あの時勇者のつるぎを以て打ち砕いた――カルデアスという装置は冴え冴えとした光を携え、聳え立っていた。足元に転がる数多の

亡骸を、冷ややかに見下ろしながら。

——動力部の停止を確認。発電量が不足しています。

予備電源への切り替えに異常が あります。

職員は 手動で 切り替えてください——

——隔壁閉鎖まで あと 40秒

中央区画に残っている職員は速やかに——

そのアナウンスは職員に向けたものであった。

イレブンにはその意味がわからなかったが、隔壁閉鎖がなされれば、此処から出ることは出来なくなるだろうことは想像出来た。そうなれば炎に巻かれて死んでしまう。

「……僕は地下の発電所に行く。

カルデアの火を止める訳にはいかない。

君は急いで来た道に戻るんだ。まだギリギリで間に合う。

此処まで巻き込んでしまった僕が言うことではないけど、君はこんなところで死んではいけない。

いいな、寄り道はするんじゃないぞ！ 外に出て、外部からの救助を待つんだ！」

ぐと唇を噛み締めたロマニは、イレブンの肩を掴んで言い聞かせるように言った。

真剣な光を宿した瞳が、彼のそれと交差する。

彼がロマニに返事をする間はなかった。ロマニはそのまま駆け出してしまったのだ。

残されたイレブンは、血の匂いに満ちた部屋を見回す。

すると部屋の壁に力なく凭れる少年の姿を見つけて、彼は駆け寄っ

た。

外傷は負っていないように見えて、声をかけてみる。

しかし……。へんじはない。ただのしかばねのようだ。

イレブンと同一年か、それよりも下か。

ミツシヨンとやらのために集められた少年少女たちが、まだあどけなさの残る顔に恐怖を浮かべ倒れている。彼は、そつとその顔に手を伸ばすと、恐怖に見開いている少年の目を閉ざした。

「――まさか、……。再びその顔を見る時が来ようとはな。悪魔の子よ」

後ろから聞こえてきた声に、イレブンは勢い良く振り返った。

するとそこには、なんとかつて敵対した参謀の姿があったのだ。

その長い金髪は変わっていないが、身に纏っているのは彼の記憶にある白を基調とした甲冑ではない。

イレブンは、シンプルな黒い服の上に白衣を着たその男を、思わずまじまじと見た。

首元に飾られた金のネックレスが、燦る炎に照らされて煌めく。

「ふん。どうした？　かつて散々お前を甚振ったこのホメロスの姿に恐れ慄いたか。

何故此処にいるかだと？　それは此方の台詞でもあるんだがな。

……お前と、あのウスノ口に不覚を取った後、俺は確かに大樹へと還った。

そして生まれ変わったのだ。誇り高き魔術師の一人として」

前髪を掻き揚げる仕草は、時折その男、ホメロスが見せていた癖である。

イレブンは目の前に立つホメロスが、その端正なルックスから特に

女性に人気があつたことを思い出す。

そして男の言つた『ウスノロ』は、かつてのイレブンの仲間
でイレブンの盾となつた騎士のことを指しているの
だろう。ちなみにそのウスノロは特に男性にモテ
ていた、これが悲劇の一端を握ることになる
のだが今は過去の話をしている場合ではない。

「俺は今、このカルデアの司令官の一人だ。

……だからお前に命じる権限がある」

素直ではない捻くれた言葉もまた、ホメロスの特徴
なのだが、どうも様子がおかしい。

イレブンの知るその男は、もつと高慢だつた筈だ。

人を見下し、寄せ付けない冷たさを持つていた筈
の男は、ただ静かに彼を見た。

「お前をマスターに任命する。レイシフトへ行け。

……どういふことかだど？ ええい！ そんなことを
今話している場合か！

それでも貴様……——勇者か！」

勇者の光から、邪神は生まれる。

即ち勇者こそ悪の権化と謳い、最後までイレブンを『
悪魔の子』と呼び弾圧し続けたホメロスの口から零れたその言葉に、
イレブンは目を丸くした。だが何故かそれはホメロスも同じであつた。

「っ!?ば、馬鹿め！俺が貴様を勇者と認めることなど……！

……もう、いい……。行け。悪魔の子よ。

俺はもう双頭の鷲の一人でなければ、魔軍司令でもない」

噛み締めるように、吐き出すように言つたホメロスは、
ぱちん！と指を鳴らした。

がりがりがり……とカルデアスが軋み、起動音のような音がしたかと思うと、突然輝き出したのだ。

——システム レイシフト最終段階に移行します。

座標 西暦2004年 1月 30日 日本 冬木

——ラプラスによる移転保護 成立。

特異点への因子追加枠 確保。

アンサモンプログラム セット。

マスターは最終調整に入ってください。

——観測スタッフに警告。カルデアスの状態が変化しました。

シバによる近未来観測データを書き換えます。

——近未来百年までの地球において 人類の痕跡は 発見 できません。

人類の生存は 確認 できません。

人類の未来は 保障 できません。

抑揚のない淡々としたアナウンスが流れ始める。

振り返ってイレブンの顔を見たホメロスは、呆れたように溜息を吐いた。

「悪魔の子よ。いいか、これだけは言っておく。

この世界では人間は基本戦わぬ。いや戦う力を持たないのだ。

先ほどシミュレーションで際限なく暴れ狂ったのは愚策だったな。

その所為で面倒なものに目をつけられたぞ」

ぽかんとしたイレブンの顔を、鼻で嘲笑ったホメロスは、彼が何も

理解していないことを察した。

この世界を救う為に態々起こされた勇者。何も知らずとも救うことを義務付けられているのかと、憐みすら感じる。それに何も異を唱えない馬鹿な男だと、ホメロスは目を伏せた。

そんな単純で、愚鈍で、それでいて愚直な男が、自分の近くにもいたことを思い出していた。

「……貴様には言いたいことが山ほどある。

しかし今は、その時間はない。

悪魔の子よ。我が友が認めた勇者よ。これを持っていけ」

そう言うときホメロスは、小さな機械を投げ渡した。

「通信機器だ。持っているろ」

イレブンがその通信機を手にしたのを確認すると、用が済んだとばかりにホメロスは身を返す。

ばさりと翻った白衣に、鷲の紋章が見えた気がして、彼はその姿が見えなくなるまで見つめていた。

——中央隔壁 閉鎖します。

館内洗浄開始まで あと ***です。

——コフィン内マスターのバイタル 基準値に 達していません。

レイシフト 定員に 達していません。

該当マスターを検索中……発見しました。

——適応番号47 イレブンを

マスターとして 再設定 します。
——レイシフト開始まで

3

2

1

全行程 完了。

セカンドオーダー 実証を 開始 します——

『い、……お、い、……起きろ!!』

貴様いつまで寝てるつもりだ!? 殺すぞ!』

『ま、まあまあ、ホメロス。』

そんな物騒なこと言っちゃダメだよ』

いつの間にか意識を飛ばしていたらしい。

イレブンがそう気付いたのは、耳元でそう怒鳴る声を聞いてからであつた。

目が覚めた途端に、目に入ってきたのは硝煙と炎。鼻をつくのは灰

のにおい。

此処もまた地獄と化した場所であることは、わかりきっていた。

『おい、呆けるのは後にしろ』

『大丈夫かい、イレブン。』

こちらはカルデア管制室だ。聞こえているようで良かった。

……どうやらすっかり君を巻き込んでしまったようだね』

『もとよりその運命にある男だ。気にするだけ無駄だろう』

『相変わらずキツいなあ、ホメロス』

『レイシフト適応、マスター適応、……上等じゃないか。』

『このまま貴様を正式な調査員として登録する』

『……。強引すぎる、と言いたいところだけど……。』

すまないイレブン。無事にレイシフトを完了したのは君しかいないんだ。

……そして、すまない。何も事情を説明しないままこんなことになつてしまった。

わからない事だらけだと思うが、どうか安心してほしい』

『ふん。貴様には、武器がある。』

人類最強の兵器がいなくとも、切り抜けられるだろう』

『……ううん、当惑するのも無理はないよ。』

君にはマスターと英霊の説明さえしていなかったし……』

『どうやら、そう長く話は出来ないようだぞドクター』

『むっ、予備電池に替えたばかりでシバの出力が安定していないのか。』

仕方ない、説明は後ほど』

『……そこから2キロほど移動した先に、霊脈の強いポイントがある。』

貴様が途中でくれたばらずにたどり着けば……。通信も安定するかもな』

『いいかな。くれぐれも無茶な行動は控えてくれ。』

こつちもできる限り早く電力を――』

ぶつりと音を立てて途切れた通信は、しばらく機能しないであろう。

むしろ今繋がったのが奇跡なのかもしれないと、イレブンは物言わなくなった通信機器を眺めてぼんやりと思った。

至るところから感じるのは、まものの気配だ。

モンスターハウスの中に閉じ込められたように、濃厚で濃密な「邪悪」がイレブンの肌を刺す。炎上を続ける街の中にイレブンは、まものとはまた違った気配を感じた気がした。

自分の装備は『鋼のつるぎ』のみだが、幸いなことに『前の旅』で覚えた呪文ととくぎは引き継がれているらしい。仲間がいないので『れんけい』は使えないようだが、たたかうことはできそうだ。

イレブンは自分の装備とどうぐぶくろをあさり、一通りの所持品とつよさを確認した。

なんと、イレブンは今までの経験値をすべて失っていた！

スキルパネルも初期の状態に戻り、今まで取得した呪文もとくぎもすべてが白紙に戻されていた。スキルパネルは自身の熟練度のようなもので、解放させる度に特別な能力が身に宿るものだ。どれも魔なるものと戦うために必須なものだが、どうやらまた振り出しに戻ってしまったらしい。

あたらしい世界に、あたらしい旅のはじまりに、ある意味では相応しい状態なのだろう。

とはいえ、あれだけの時間をかけて積み上げた経験値を失ったショックは計り知れない。

がつくりと肩を落としてつつも、イレブンは歩き始めた。

広大なフィールドを駆け回るのは慣れていたが、しばらくして何か物足りないことに気付く。なんだろうと首を捻ったが、その答えはすぐに出た。

いつもは後ろに続く仲間の姿があり、声があった。だが、今はなにもない。

後ろを振り向いてもそこには、炎上する大地と、徘徊するまものの影があるばかりであった――。

そういえば、とイレブンは気付く。

肩にいた筈のベビーパンサーの姿がなくなっていた。

此処に飛ばされた際にはぐれてしまったのだろうか。

近くに気配も鳴き声もしないので、もしかしたら自分と同じように飛ばされて彷徨っているのかもしれない。そう考えたイレブンは、注意深く辺りを探索しながら先へと進み始めた。

道なりに沿って進むと、いくらかの敵とエンカウトした。

イレブンはまものたちと戦いながらも、此処が『アンデッド系』と呼ばれるまものたちの巣窟らしいことに気付く。伽藍洞のよろいが剣を携えてがしやがしやと歩き回り、体中に腐臭を纏うくさったしたいがこれ見よがしに倒れている。

非常に近付きたくない光景ではあるが、近づかないと先には進めない。

イレブンが背中中の剣を抜くと同時に、その音に反応したのだろうか。ものたちは一斉に気付き襲い掛かって来た。

取得した呪文やとくぎを失ったとはいえ、戦闘における勘は忘れてはいない。いまいち動きの冴えない自身にイラつきを感じながら、イレブンは剣を振るった。

レベル初期値のうえ、HPやMP共に回復させるアイテムも所持してはいない、絶体絶命の状態の中でも彼は冷静さを失ってはいなかった。

『いのちをだいじに』しつつも、攻撃に回らなければ敵は増える一方である。

なかまがいらない今、かいふくや補助、まほうを1人で担わなければならないのだが、イレブンはどれも使うことができない。

そうして何体かの敵を切り伏せると、ふいに空から軽快な音が聞こえた気がした。折り重なるように流れ続けるそれは、もとの世界でなじみ深い音色である。

いくつかその音を聞くと、イレブンは体に力が宿るのを感じた。それと同時にいくつかの呪文が頭の中に甦って来る。ホイミやスキルトといった回復・補助の呪文と、攻撃呪文のメラである。今のイレブンにはありがたいものだが、それらを駆使して戦い続けるには、如何

せんMPが足りない。

飛び付いてきた『したい』を炎の下級呪文で燃やし、切り掛かって来た『よろい』の剣をはがねのつるぎで受け止める。その剣捌きはいくらレベルが低くとも、邪神を打倒し、世界を救った勇者に相応しい鮮やかさだ。

そうして群がりはじめたまものを、うまく引き付け分離させ、一体たおしていく。

しかしついに、イレブンはまものにまわりこまれてしまった。

いつもの癖で戦闘音を気にせず戦っていたので、四面楚歌を許してしまったのである。

そして、想定外であったのは、そうして戦っている間にも敵がどんどんつよさを増してきているのだ。自分のレベルを超えたまものたちを前に、イレブンはぐつと奥歯を噛み締めた。

にやー、と足元から聞こえた獣の鳴き声に目を向ける。

するとそこには、なんとも不思議な生き物がいた。黄色の毛皮に、黒い斑点。鮮やかな赤いたてがみ……。ベビーパンサーと呼ばれるまものだが、彼はそれを知らない。

足元にじゃれつくその生き物に目を細めると、膝を折り目線を合わせるようにしゃがみ込んだ。青いフードに覆われた顔の唯一露わとなっている口元には、ほのかな笑みが湛えられている。

「なんだお前さん。アイツらのご同輩か？」

にしちや、危機感がねえってか……人懐っこいな」

無防備に伸ばされた手が、わしわしとベビーパンサーの頭や首を撫でる。

すると気持ち良さに体を振ったベビーパンサーは、ごろりと仰向けになると毛むくじやらの両手で自分の体を撫でる腕を挟み込んだ。

ぴたりと肌当たる肉球からは爪は出ておらず、ベビーパンサーが本当にただじゃれているだけだということを証明している。

もはや剥き出しの腹部に手を移すと、まだまだ柔い皮膚と毛皮の感触に包まれた。

片手に持った杖を地面に付きながら、ベビーパンサーを構う男——キヤスターは、思案する。彼はこの特異点に『呼ばれて』から辺りを見て回っていたが、『いつもと違う』ことばかり起きていることに気が付いていた。

黒化し自我を喪失した元英霊に、見たこともない形態をした化け物たち。前者はまだ理解ができたが、後者には歴戦の英雄である彼も、困惑していた。

「……なんであんなモンが混じってやがる?」

それに、あの勇者サマは何処をほつつき回ってんだか……」

彼の『どうぐ』となっても付いていく、と口にした強引な言葉は嘘ではない。

キヤスターが『記憶』を無くさずに、此処にいるのもその証のようなものであろう。

「流石に二度目となりや、大体のことはわかるが……」

しっかしまた、鍛え直しかよ。どうせなら霊基も受け継ぎたかったぜ」

はあ、と溜息と共にぼやいた言葉は、キヤスターの今の状態であった。

マスター『リツカ』とこの地で出会い、数多のレイシフトを経て辿り着いた先が……『予期せぬ破滅』であったこと。そして、失われた世界に現れたのは、最古の伝説と謳われるあの『冒険の書』の勇者であったこと。キヤスターは全てを記憶していた。しかしその体は初期の状態に戻され、極限まで強化されていた力もまた失われてしまっていた。

嘆いていても仕方ねえか、と立ち上がったキヤスターは自分の足元を再び見る。

そうして、子どもらしい2つの大きな目で見上げるベビーパンサーの首根っこを掴み上げると、目線を合わせてにっと笑った。

「お前さん鼻は利くかい?」

キャスターの問い掛けに、目を瞬かせて首を傾げたベビー・パンサーは、しばらくして「みやあ」と鳴いた。

勇者の聖杯探索

——ぱりぱり、と地面を駆け抜けた黄色を帯びた光に、そこにいたものたちは一様に地に伏せる。体はぴくぴくと痙攣し、口から泡と煙が吹き上がる。あつという間に黒焦げと化したまものたちを見下げると、イレブンはやつと肩の力を抜いた。

勇者に授けられた「いかずち」は、魔を裂いて光を齎すもの。

その呪文を忘れてしまった筈のイレブンは、何故それを放てたかというと、所持品に入っていた『とあるもの』のおかげであった。

今放たれたのは、厳密にいうとイレブンは授けられた雷ではない。『いかずちのつえ』という杖は装備するだけではなく、どうぐとしても使用することができる優れものである。イレブンは杖を掲げると、空から幾重もの鋭い光が降り注いだ。

勇者のいかずちよりは劣るが、下級魔物を一掃する程度の威力はあった。

イレブンの目の前、すなわち雷が落ちた場所には巨大な穴が開き、焦げた臭いと雷の余韻がまだ残っている。あれだけ群がっていたまものは、姿を消していた。

黒ずんだ空に一瞬だけ輝いた雷は、とてつもない轟音を放ったが、どうやらもう寄って来る敵はいないらしい。これで戦闘終了だろうと剣を下したイレブンは、背後に気配を感じて、反射的に身を翻した。

「ホツホツホー！ 人間如きが騒々しく暴れまわっていると思ったら、なるほどあなたでしたか」

聞くだけでヒトの神経を逆撫でる声に、イレブンは再び剣を構える。

そこにいたのは、どぎついピンクの鱗に黄緑色の肌の『りゅう』の

ような姿をしたまものであった。金よりも地位よりも、なによりも『絶望する人間』を好むという、なんとも悪趣味なまものの名は『フルフル』。

かつてイレブンとその仲間たちの前に立ちふさがったまもの1体である。

「まさか再び見^まえることになろうとは……」。

ふっふっふ……あなたも運がないですねえ。

おやあ？ あの羽虫たちの姿が見当たりませんねえ」

厭味つたらしい慥無礼な口調は、丁寧なように人を嘲り蔑むものでしかない。

にたりとした笑みを浮かべながら、フルフルはイレブンへと近付いていく。

「さてはあの虫けらどもは、*“来ていない”* のですね。

ホッホッホ！ いい気味です。

では……ひとりぼっちのかわいそうなあなたに、この私を散々コケにしてくれたお礼して差し上げましょう」

ぱちん、とフルフルが指を鳴らすと、なんと4体のまものあらわれた！

「ああ、あの時と同じとは思わないでくださいよ。

こう見えてワタシは受けた屈辱はきつちりと返す主義でしてね。

柄でもありませんが、ほんの少しばかり本気を出して*“修行”*をして参りました。

それに……。フッフッフ、この世界には素晴らしい方がいますね。このワタシを認めて力を貸してくれたのです」

ぎらりと輝いた瞳に、イレブンは剣を握り締める。

過去の自分ならば1人でも戦うことは可能であっただろう。

しかし今は違う。レベルの差は明らかであり、残りのHPやMPを考えても一撃でぜんめつとなる可能性が高い。そしてこのまものからは、逃げることはできない。

もはやイレブンには、死力を尽くして戦う以外の選択制は残されていないかった。

フルフルの言葉にはいくつか気になることがあったが、それどころではない。

イレブンは先ほどの『いかずちのつえ』を天高く掲げた。

「ふん、そんな小手先の攻撃など…通用しませんよ！」

短い詠唱と共にフルフルとそのなかまの前に、薄い膜が張られる。

しまったとイレブンは顔を青くした。

それは「マホカクタ」と呼ばれるカウンターの呪文であった。

その名の通り、使用者に魔法を跳ね返すもの。

ばかり、と膜を打ち抜いた雷は例外なくイレブンめがけて、はねかえってきた！

「おや……？」

正面からまともに雷を浴びたイレブンは、なす術なく地に膝をつける。

たったそれだけのダメージで瀕死の状態となったイレブんに、フルフルは眉を上げた。

「おやおや、もしか……あなた」

にやりと笑ったフルフルは、ゆっくりとした足取りでイレブンへと近付いた。

地面に剣を刺して体を支えるイレブンは、自分を見下げるまものをにらみ上げることしかできない。

「ホッホッホー…これは愉快だね。まさか——」

自分の武器の先端をイレブンの喉元に突き付けると、フルフルは高らかに笑った。

「弱体化した勇者なんて、なんてつまらないのでしょうか——！」

このまものは相手を手玉に取ることに長けており、元々の性質である残虐性と嗜虐性も相まって、他のタイプのものよりも厄介な敵であった。知能が高く相手を弄ぶことを好むものに、取り乱すのは悪手であろう。イレブンは唇を噛み締めながらも、冷静さを捨てずフルフルを睨み付けた。

その瞳は——どんなに絶望の淵にあらうが絶えることを知らな

い、強い光を宿す。闇のものであるフルフルにとって、これほど忌まわしいものはなかった。

「ちっ……下等生物如きが。」

人をいらいらさせることだけは一人前ですねえ。

良いでしょう、……あなたには死んでもらいます。

ただし——存分に甚振った後で、ねえ！」

突き付けられた杖に、魔力が込められる。

ゼロ距離から放たれようとする魔法に当たれば、イレブンは確実に『しに』いたるであろう。回避しようにも、いつの間にか背後にはフルフルの呼んだまものたちが回り込んでおり、同様に呪文を唱えようと構えていた。

絶体絶命の状況の中で、イレブンはぐと手を握り締めた。

——『勇者とは決して、諦めないもの』

いつか命を懸けて助けてくれた、人魚の王の言葉が頭に甦る。

記憶の中の言葉に奮い立たせられるように、イレブンは下げかけていた視線を上げる。まだその手には剣がある。微かではあるがMPも残っている。

このまま諦めるのには早く、このまま足掻くのには充分であった。フルフルとそのなかまたちが詠唱を終えるのとほぼ同時に、イレブンは立ち上がる。

——ぱあつと、左手の紋様が輝き始めたのは、その時であった。まるで勇者を導き守るように、大樹の御印はイレブンの危機に反応したのだ。

目に焼き付くような光が周囲に拡散し、イレブンは思わずもう片方の腕で目を庇った。

「いってえ……!!」

「おいおい、こりや……どういうことだ？」

「……(こ)は、」

ごく最近聞いたような声に、イレブンはゆっくりと腕を下げた。

そうして光の残影が映る目を幾度と瞬かせると、ようやくと再び鮮明な視界を取り戻すことに成功した。

「お前さんの仕業か、勇者サマ？」

「まったく、随分荒っぽいじゃねえか。」

「それに……余計なモンまで呼び寄せてやがる」

「……！ 貴様は……！」

「よう、奇遇だな。……堕ちた弓兵さんよ」

「ほぎげ。いつもの得物はどうした？」

「牙を抜かれた犬に成り下がったか」

「ああ？ ぎげんな、これはアレだ。」

「偶にや知的にいこうと思ってだな……」

光の中から現れるように姿を見せたのは、2人の男であった。

1人は、イレブンも知る人物であったために説明は不要であろう。

しかし、もう一方の男は記憶になかった。灰色の髪に金と黒の瞳の男は、弓を手にキャスターを睨み付けている。

普通に会話を交わしてはいるものの、その体は闇を纏っていた。

彼のそれを見るに、まものに近い存在なのだろうかといレブンは首を傾げた。

まものの中にも人型をしたものがあるので、それほど珍しいものではない。

しかし、なんとなく魔のものとは違う気がした。

「何ですか、お前たちは……！」

折角勇者を甚振って差し上げようとしていたのに、水を差すとは……。

「許しませんよ！」

「……おい、弓兵。」

「お前さんのお仲間が何か言ってるぜ。」

「早く何とかしろよ、めんどくせえ」

「はっ。何を言っている。貴様こそ関係者じゃないのかね。」

私はそのように品格のないものなど知らんよ」

「……っ！ ホッホッホーワタシだって知りませんよ。」

そんなお粗末極まりないおバカさんたちなんかね。」

精々仲良く塵にかえして差し上げましょう」

やれやれと首を振ったキャスターは、地面に尻もちを付いたイレブンを肩に抱え上げると、弓兵と呼んだ男にそう言った。キャスターの視線を受けた弓兵は心外だと顔を歪ませて、そう返す。

2人の反応に、ぴくぴくと唇を震わせたフルフルは怒りのままに杖を構え直した。どうやら相手を挑発するために放った2人の言葉は、『かいしんのいちげき』であつたらしい。

ぶちぎれたフルフルは、怒りを撒き散らしながら2人へと吐き捨てた。

それが、特大の地雷を踏み付ける言葉であるとは露知らず。

「ああ?」

「はあ?」

ぴきり、と2人の額に青筋が立つ音がイレブンには聞こえた。

キャスターは、イレブンを後ろの岩場に下しルーンを起動させる。

堅い守りが約束されるその魔術がちゃんと発動したのを確認すると、イレブンに「待ってな」と声を掛け、キャスターはフルフルの前に立ち塞がった。

「ちいと手貸しな、信奉者」

「誰が信奉者だ。……しかし、まあ仕方あるまい」

イレブンは当然知らなかったが、2人は犬猿の仲を極めた仲間である。

英霊である彼らは、マスターとなる人間に召喚され世に顕現する。

その時々によって召喚される英霊は異なるので、同じ英霊とそう何
度も会うことはまずない。しかし、この赤と青は毎回奇跡的な共演を
果たすことに定評があった。

キャスターはもちろんのこと、特異点に蝕まれた身でありながらも
アーチャーは自我を保っていた。だからこそ、フルフルの禁忌の
言葉にいつも通り怒りを覚え、額に青筋を立てたのだ。

この2人に決して言うてはいけない、禁断の言葉。

それは『一緒にされる言葉』や『仲が良い』といったワードであり、
フルフルは見事に全て踏み倒したのである。

「ふん、……虫けらどもが。」

このワタシに逆らうなど、生意気なんですよ!!」

イレブンへ放たれるために溜めた魔力を解放したフルフルは、
炎の上級魔法^{ベギラゴン}を唱えた。地獄より呼び出された炎が2人を包み込む。
「ちっ、」

再び守りの魔術を発動したキャスターは一度後退する。

背中に庇われたイレブンは、キャスターにフルフルに掛けられ
た呪文『マホカクタ』について告げた。

「跳ね返す呪文だあ？ ふざけやがって。」

俺に対する嫌がらせにもほどがあんだろ」

「下がりましたまえ。魔術が封じられた魔術師など邪魔なだけだ」

「まあ、ちっと待て。俺に考えがある」

同じく炎から逃れたアーチャーは、鼻で嗤うとキャスターにそう吐
き捨てた。

ひくりと口角を動かしたキャスターは何を考えたのかにつと笑う
と、杖先をフルフルに向けた。

「――anzusi」

キャスターが唱えると、幾つもの火の玉がフルフルへとおそい
かかった!

しかし案の定、ふしぎな膜によって跳ね返され、使用者であるキャ
スターのもとへと返っていく。厄介だな、と呟いたキャスターは、杖
に何かを唱えると飛んできた火の玉目掛け振るう。すると木製の杖

には引火することなく、なんとキャスターは火の玉を杖で打ち返したのだ。そしてその打ち返された火の玉たちの向かった先は――

「なっ!!」

「誰が役立たずだった? なめんじやねえ。」

「魔術だけの魔術師なんて芸のねえ真似、俺がするわけねえだろ」

「ざまあみろ、と言わんばかりの表情でキャスターはアーチャーを鼻で嗤った。」

「一見悪ふざけのように見えなくもないが、これは八つ当たりも兼ねた実験であった。いや、キャスターの様子から実験を兼ねた八つ当たりと言った方が正しいかもしれない。」

「要するに、だ。」

「魔術がだめならすることは1つよ」

「くるりと杖を回したキャスターは杖に強化を施すと、フルフルの周りにいたまものをぶん殴った。その攻撃は剣や槍には劣るものの、強化値と彼の元々の能力が加算されており、木製の杖とは思えないほどの音を立てて的中する。」

「はあ、結局そうなるのか」

「服を焦がしたアーチャーは適切な距離を取ると、弓を番える。」

「キャスターが敵に殴り掛かったのに合わせて放った矢は敵を貫通し、その後ろにいたフルフルをも巻き込んだ。」

「ぐ……っ、このっ!」

「フルフルはよろけたが大きく体勢を崩すことはなく、次々と呪文を唱える。」

「周りのまものたちもそれに合わせて、2人へとおそいかかった。」

「苦戦しつつも、見事な戦いを繰り広げる赤と青の背中を見ながら、イレブンは体を動かす。雷を一撃喰らっただけで相当なダメージを」

負った体が、情けなくて、悔しくて堪らなかった。

痛みに顔を歪めたイレブンは、不意に膝にあたたかな温もりを感じて視線を下げる。するとそこには、なんと「みやあ」と鳴き声を上げるベビーパンサーの姿があった。

慌てて怪我をしていないかを確認するが、どうやら傷一つ負っていないようだ。ほっと息を吐いたイレブンであったが、自らを見上げるベビーパンサーの大きな目に言葉を詰まらせた。まるで「このままで良いのか」と、問うているようにも見えたのだ。ひよっとしたら、それは自らの心の声であったのかもしれないが、イレブンは居てもたつてもいられなくなった。

あれだけ惜しんでいたMPをすべて使う勢いで、憶えたばかりのホイミを自分へと掛ける。HPはすぐにまんたんになったが、その代わりMPはもう底が見えていた。

痛みを感じなくなった体で立ち上がると、イレブンは足元に転がっていた剣を掴む。そうして剣を両手で構えると、剣先を天へと向け、祈りを捧げるように『集中』した。

全神経を集中させ、『ゾーン』へと入っていく。

先ほどの戦いにより、その境地へとすぐに到達することができた。

ゾーンは身体能力が大幅に上がり、なかまも同様の状態であれば、れんけいという強力技が使えるようになる。

イレブンがすぐにゾーンを発動させたのは、戦い続ける2人がゾーンに突入した証拠である光を纏っていたからだ。この世界にもゾーンはあるらしいと判断したイレブンは、駆け出すと2人の間に並び立つ。

「なっ……い！」

「もうおねんねは良いのかい、マスター」

夫婦剣を振るい相手の攻撃を受け流したアーチャーは、隣に立つ少年の姿に驚いた。キャスターとどういふ関係かはわからないが、人間である彼が戦場に出るなどと愚の骨頂と言えよう。慌てて下がらせようとしたが、イレブンの隣に現れたキャスターは平然とした顔で笑った。

「お前のマスターなら、後ろで大人しく……」

「れんけい？ ……まさか、お前さん……」

俺にコイツと協力しろっていわねえよな？」

イレブンは2人に『れんけい』について説明した。

戦闘中であるので非常にぎつくりとしたものであったが、意外にも真剣に耳を傾けた2人は嫌そうに顔を引き攣らせる。その心は共通しており「なんでコイツと協力する必要があるんだ」といったものであろうことは、想像に容易い。

だが同時に、イレブンには確信があった。2人の戦う姿を見ていると、何だかんだ協力をしているのだ。攻撃を近距離のものに切り替え、たキャスターと、遠距離と近距離を自在にこなすアーチャーは、互いの戦い方を熟知しており、互いを利用しようとするため、自然とれんけいが出ていたのだろう。

「……はああ、案外アンタ頑固だよなあ」

じつと自分を見上げる目が、梃子でも動かぬ意思の表れであることに気付いたキャスターは、しばらくして溜息を吐いた。同様の表情でアーチャーも肩を竦める。

降参だとキャスターは両手を上げると、「どうすりゃ良いんだ？」とイレブンへ問い掛けた。

1つ頷いたイレブンは、キャスターとアーチャーそれぞれに指示を出す。

そして――。

アーチャーは意識を集中させ、1対の剣をつくりだした！

キャスターは目を閉じ詠唱し、剣に炎をまとわせた！

イレブンは深く呼吸をすると、もえさかる炎をまとった剣でかれいにまいおどった！

誰が名付けたか『ほのおのまい』という名の技は、本来ならば今の

イレブんに扱うことはできないレベルの技である。しかし、まだ自分と戦うものがあるということを示され、このまま終わるわけにはいかない、強く心に思ったイレブンは、一時的という条件のもとその技を思い出したのだ。

それはかつて勇者を導くために遣わされた双子のひとり、赤い頭巾の少女と共に使用した技であり、二度と使うことはあるまいと思っていた技でもあった。

技名に表す通り——火の粉を舞わせ、炎をくねらせ、華麗に舞い踊る。

燃え盛る街を背後に、過去の記憶を手繰り寄せながら、イレブンはその剣でフルフルを切り付けた。

「——ぎゃあああつー！」

耳障りな悲鳴を上げたフルフルは、今度は踏ん張ることができず地に仰向けに倒れ込む。それを見届けると同時に、イレブンの手にあった双剣は溶けるように消えていった。

「ほう、すげえじゃねえか」

息を切らせたイレブンの肩に、キャスターの腕が乗せられる。

視界の端でさらりと揺れた青の髪にかつての相棒を重ねかけて、イレブンは軽く頭を振った。

「……見事なものだ、が……。その紋章は、まさか」

アーチャーはキャスターの反対側に立つと、イレブンの手の甲をまじまじと見つめた。彼もまたそれに見覚えがあったのである。

「——始祖の勇者」

「ああ、そうさ。俺のマスターにして、始祖の勇者サマは、この世界を救うためにご降臨あそばされたってわけさね」

眩くように言ったアーチャーの声に反応したのは、どことなく得意げな顔をしたキャスターであった。何故貴様がそんな顔をしているんだ、と頬を引き攣らせたアーチャーは、咳払いをすると再びイレブんに視線を戻す。

「このようなところで、まさか『かの勇者』と出会い、共闘することになるとはな。ああ、相変わらず……。運がない」

眉を下げたアーチャーは自嘲めいた笑みを浮かべた。

それにイレブンは首を傾げ、キヤスターははつと鼻を鳴らす。

「お役目を果たそうって魂胆かい、信奉者」

「だから言っているだろう、私は信奉者ではないよ」

青と赤の間に走った緊張に、イレブンは困惑する。

そもそも突然現れたに等しいこの『赤い男』について、イレブンは何も知らないのだ。

キヤスターは一々訳知り顔をしているが、教えてはくれない。

イレブンはアーチャーへどうということだ、と問おうとした。

——その時であった。

「——っ、危ない!!」

どんっ、とイレブンの体がつよい力で突き飛ばされた。

意表を突かれ後ろへと転がったイレブンは、慌てて体を起こすと、目の前の光景に目を見開く。そこには、胸を貫かれたアーチャーの姿[〃]があつたのだ。

「っち、」

鋭く舌を打ったキヤスターは、イレブンを背に庇いルーンを発動させる。

再び張られた守りの結界が、迫りくる『炎』から2人を守った。

「てめえ……」

「ああ、本当に腹が立ちますねえ。

あなたが初めてですよ、2回もこの私をコケにしたお婆かさんは」
怒りを叩き付けるように投擲された杖は、槍の如くアーチャーの胸を貫いた。

以前に戦ったフルフルは所謂『まほうつかい』で、『物理攻撃力』は低い筈である。なので魔法以外の技は大したことはないと油断していたのが、悪かった。

先ほどフルフルが自分で言っていた『修行』の成果なのかもしれないが、相当にパワーアップをしているようだ。

イレブンは自分を庇ったアーチャーに駆け寄ると、杖を引き抜いてホイミを唱える。イレブンは知らなかった。目の前の存在は『生身の人間ではない』のだ。英霊である彼らは、霊核を砕かれてしまってもう顕現を維持できない。

「これは、癒しの呪文というやつか。

……なるほど、包み込まれるようにあたたかい。

「だが勇者よ、残念だが俺には無用だ」

消えゆく体は、留まることはない。

フルフルの杖はいしんのいちげきとなり、アーチャーの霊核を砕いた。

それでも、イレブンはアーチャーの胸の上に手を翳して、必死に唱え続けた。

たとえ素性のわからない男であっても、人間ではなかったとしても、失い続けてきたイレブンにとって、『喪失』は『死』と同義なのだ。

MPを使い果たしたとしても、それでも——助けなかった。

「勇者よ、……いや、イレブン」

突如呼ばれた己の名に、イレブンははつと我に返る。

何故か名を知っていたアーチャーは、ふと笑った。

「……もし、君が力を求めるなら俺を呼んでくれ。

こんな歪な姿ではなく、適切な姿で……応じよう。

それがきつと——」

アーチャーはイレブンの紋様に手を伸ばす、が……。

指先が触れるか触れないかのところで、その指は、手は、体は——消失した。

「……最後までカツコつけやがって。

何が悲しくていけすかねえ野郎の……。

いや、まあ、仕方ねえか」

目を伏せたイレブンの背後から、深い溜息が聞こえた。

振り返るとなんとそこには、消えたアーチャーが使用していた『弓』を手にしたキャスターの姿があった。

「だがなあ、いくら俺だって弓の適正はねえぜ。」

無茶ぶりにもほどがあんだろ」

杖と弓を手に困惑の表情を浮かべるキャスターは、ぶつぶつと何かを呟いている。

フルフルは今にも襲い掛からんばかりに、2人を睨んでいた。

とにかく今は戦闘を、とイレブンはキャスターに向かって左手を伸ばした。

すると、再びイレブンの紋章は輝きを放つ！

「なっ!?!」

その眩い光はあつという間にキャスターを包み込むと、その場にいる者たちの視界を奪う。まものたちは皆「めがくらんだ」ようで、一時的に見えなくなった目を抑えていた。

「……前のマスターん時も大概だったけど……」

アンタと一緒にいると驚かされてばかりだ。

にしても強引すぎだろ。ここまできると笑っちゃまうぜ」

光の中心に立つキャスターは、豪快な笑い声を交えながらそう言った。

その声音が心底愉快そうなものであったことは、言うまでもないだろう。

「臨時のアーチャーだ。」

ははっ、2度とこんなことはねえと思うが……。

折角だ。あの野郎よりも劣らず勝る弓裁きごらんにいれよう」

あの野郎と似た格好なものには吐き気しかしねえが、この際文句はいわねえよ。と名乗りにつけ加えた元キャスターは、明らかに赤のアーチャーの色違いのような恰好をしていた。これはイレブンの「弓兵

のイメージ”が具現化されたものであるため、英霊を2人しか見たことがなく、かつアーチャーといえば先ほどの英霊しか知らなかったことに起因するのだが、キャスターは黙っておいた。

全くの適正がないクラスに変えられたのは、ひとえに勇者きせきの力きによるものである。キャスターは一通りの文句を口にすると、弓を構えた。

『かつこんな緊迫した状況下で、うだうだと文句を並べるほど器量は狭くはねえ』そう理路整然と知的を装い感情をコントロールしてみせたその口元は、思いつき引き攣っていた。

「つてか、寄こすなら弓じゃなくて槍を寄こしやがれって話だ。

嫌がらせか？ 嫌がらせだよな」

思わず口から零れる愚痴に、やはり歯止めは掛かっていない。

もちろん、赤のアーチャーの思惑は伝わってはいた。弾かれてしまう魔術師よりも、得意ではないとはいええ弓矢の方がダメージは通るであらう。

「それでも、武芸を極めし影の女王に師事した身なんですね。

なめてもらっちゃ困るぜ」

ぱちりと赤い目を片方閉じてみせた青いアーチャーは身軽に敵の攻撃を躲すと、矢を番える。魔力を纏い放たれる無数の矢の雨は、敵全体にダメージを与えた。

怯んだまものたちの隙を突いてイレブンが切り掛かると、すかさず唱えられたフルフルの呪文を、アーチャーはイレブンの首根っこを引つ掴んで回避させる。

回避できない技には、霊基をチェンジしたため全回復したアーチャーが身代わりとなりダメージを負う。

庇われながらも果敢に攻撃を仕掛けるイレブンに、攻撃をしつつも補助に回るアーチャーは、とても息が合っていた。イレブンとっては悔しい状態でもあったが、レベルが低い今は自分にできることをするしかない、つよく剣を握り締める。

そうして攻撃を重ねているうちに、2人は再び集中の境地へと足を踏み込んだ。

冴え渡る感覚に、にっと笑ったアーチャーはイレブンへと声を張り上げた。

「アガってきたぜ！ マスター！」

「さあ次は何をみせてくれる!?」

戦いの昂りを隠そうともせず瞳孔を開かせたアーチャーは、爛々とした目でイレブンを見る。イレブンは応えるように1つ頷いた。しかし、かつての仲間の中に弓使いはいなかったこともあり、ぱつと思いつく技はない。

イレブンは深く息を吸って吐き出すと、今の自分とアーチャーでできることを考える。そして、イレブンは所持品の中の『いかずちのつえ』を取り出すと、雷を呼び起こした。本来であれば、勇者に授けられた雷の呪文で行うのだが、その呪文を忘れてしまった今は、杖で代替するしかない。

それでもイレブンによって呼び起こされた雷は、聖なる力を宿し、魔を貫き穿つ光となるものだ。高まっていく力を感じて、アーチャーは笑う。

同時に魔力を練り上げると、1本の矢をつくりあげた。

それは矢というよりも槍に似た形状をしており、なによりも赤い。

イレブンは力を解放することでアーチャーの槍に雷を落とし、その力をまとわせた。

「いいねえ、たまらねえぜこの感じ……！」

槍をふるうのと同じ……いや、それ以上だ！

そらっ——喰らいなあ！」

弓がはち切れんばかりにしなり、ぎりぎりと言を上げる。

限界まで溜められた力を爆発させるが如く、アーチャーは弓を放つた！

膨大な力の塊を向けられたフルフルたちは、恐れおののいた。

知り得る限りの防御呪文を唱えるが、彼らの技を打ち消せる呪文は

ありはしない。一本の矢はフルフルめがけて、一直線に飛んでいく。

「ぐっ、この……!! このわたしが……っ!!!」

こんな虫けらどもにいいいいいいいい!!!」

「ははっ、虫けらだと思っていた奴らが『恐竜』だった。

それだけの話さね」

「きさまらあああああ!!」

ころすっ! ぜったいに……ころしてやる……!!!」

矢がまとう『退魔』の光は、近付いただけでもものたちを打ち消した。

光の余波に触れるとたちまち皮膚が溶け、存在そのものを消される恐怖に陥る。

もはやフルフルにあらがう術はない。まさに光速で己の身を穿った矢は、周囲にいたまものを全滅させて消えた――。

「やーっと終わったか」

イレブンはMPを消費しきった疲労感と、危機的状況を脱出した安堵感に、思わず地面に座り込む。それに笑ったキャスターは、よくやったじゃねえか、とイレブンの頭を小突いて自分も同様に座り込んだ。

キャスターと背中合わせになり、何気なく見上げた空は味気ない色をしていたが、きつとこの日のことは忘れないだろうと、イレブンは思った。

「……あー、つつかれたぜ」

ぐぐつと腕を空へと掲げ、伸びをしたキャスターがイレブんに凭れかかる。

なんとなく意地を張ってそれを押し戻すと、2人の口元には自然と笑みが刻まれていた。

みやあ、という鳴き声が聞こえイレブンは足元を見ると、今までどこにいたのだろうベビーパンサーがぴよんと膝に乗る。

視界の端で垂れる青い髪に、もう面影を見ることはなかった――

これは、あらたにはじまった冒険の書の序章に過ぎない。

しかし、あらたな相棒との出会いは、時に勇者を導く杖となり、時に勇者を守る槍となる。

すべては大樹の導きのもとに――

仲間たちは集い、やがて辿り着くであろう。

本来交わることのない2つの物語は、あらたな選択枝を描き出す。

悲しみが喜びへと変わるのか、喜びが悲しみへと変わるのか……。

こうして大樹の申し子は、再び剣を手にした。

――完――